

逗子市文化財調査報告書

第十二集

神武寺の城郭遺構

逗子市教育委員会

逗子市文化財調査報告書

第十二集

神武寺の城郭遺構

逗子市教育委員会



昭和55年 神奈川県撮影

空から見た神武寺

刊 行 に あ た っ て

逗子市教育委員会教育長

高 木 栄 一

逗子市文化財調査報告書は第一集「神武寺」から始まり、逗子全域にわたって調査されました。そしてこのたび第十二集として再び神武寺にスポットを当てました。神武寺は逗子の最古の歴史を持つ寺であるばかりではなく、四季にわたり美しい自然の姿を市民に楽しませてくれる場所でもあります。

今回の神武寺調査は中世の山城としての機能を持った寺として、その城郭遺構を調査したものです。すでに報告済みである小坪住吉城跡、名越切通大切岸と一連の関係を持つと思われます。なぜならばこの山城は鎌倉と三浦半島の境であり、半島のネックに当たる山城神武寺であるからです。

城郭というその性格からして秘められた場所でもあります。古文書にも伏せられたと思われるこの城郭遺構を調査することは大変な困難がともないます。山に分け入った測量調査は木の葉の枯れた冬期が重点的な作業期間でした。赤星直忠先生(団長)を中心にして、終日の苦勞の結果、従来の文化財を持つ神武寺でなく、中世の山城神武寺として、異彩のある姿を現わしたのです。

この古い歴史を秘めた神武寺一帯の姿を市民の皆様と一緒に学び得ることは、大変嬉しいことです。また古い歴史を物語る神武寺の植生をも加えて中世逗子を知るための、貴重な一書となることを願って止みません。最後にこの調査に関係した多くの人たちに心から御礼を申し上げます。

昭和59年 3 月31日

目 次

刊行にあたって

神武寺城郭遺構調査報告書	(1)
はじめに	(1)
調査の経過	(2)
神武寺山の地形と地質	(3)
神の岳を中心とする地形	(3)
神の岳を中心とする地質	(3)
神武寺における城郭遺構	(5)
神武寺に城郭遺構の存在	(5)
城郭遺構の説明	(6)
1. 神の岳	(6)
2. こんびら山	(6)
3. こんびら山東端	(7)
4. 薬師堂・山王社平場	(8)
5. 鐘楼平場	(10)
6. 客殿平場	(10)
7. 庫裡北西平場	(11)
8. 庫裡北側尾根	(11)
9. 鐘楼南西下広場	(12)
10. ダイラクボ尾根	(13)
11. こんびら山東端南下支尾根	(16)
12. 墓場平場	(16)
13. 表山道支尾根	(17)
14. 十州望南尾根	(20)
15. 上の谷奥	(24)
16. 鷹取山路尾根	(24)
17. 北尾根	(25)

考 察	(25)
信仰の山と山城.....	(25)
神武寺城の存在価値.....	(26)
神武寺城の時期と造成者.....	(26)
結 び	(27)
(付1) 資料にみる神武寺の歴史	(30)
古代の神武寺.....	(30)
古代神武寺の住職.....	(31)
中世の神武寺.....	(32)
中世神武寺の住職.....	(34)
近世の神武寺.....	(35)
近世神武寺の住職.....	(37)
近現代の神武寺.....	(38)
(付2) 神武寺寺域内採集の遺物.....	(38)

あ と が き

挿 図 ・ 写 真 目 次

1 神武寺の位置.....	(4)	13 表山道と支尾根.....	(18)
2 桐ヶ谷邸(堀の内).....	(5)	14 第1曲部.....	(19)
3 神武寺山遠望.....	(6)	15 第2曲部.....	(19)
4 こんぴら山と東側遺構.....	(7)	16 南支尾根山腹の登り道.....	(20)
5 こんぴらやぐら群と平場.....	(8)	17 神武寺縁起.....	(30)
6 神武寺中心部平場.....	(9)	18 神武寺薬師堂の破損仏.....	(31)
7 庫裡北西平場.....	(11)	19 みろくやぐら.....	(34)
8 鐘楼南西下平場.....	(12)	20 親王やぐら群.....	(34)
9 鐘楼南西下平場近景.....	(13)	21 略年代記.....	(36)
10 ダイラクボ尾根中心部.....	(14)	22 神武寺寺域採集の遺物.....	(39)
11 墓場平場.....	(17)	23 寺域採集の陶磁器片.....	(40)
12 墓場平場とみろくやぐら群.....	(17)	付図 神武寺城郭遺構実測図	

神武寺城郭遺構調査報告書

神武寺城郭遺構調査団

はじめに

逗子市域の城郭に関しては新編相模国風土記稿に「住吉城跡」の存在を記す（注1）のが唯一の記載である。この住吉城については昭和54年逗子市教育委員会の手で城郭全体の構造が明らかにされ、詳細な遺構図が作られた（注2）。これに先だち昭和52・53年に鎌倉と逗子との間にある名越切通が調査された。鎌倉周辺の山越路を容易に通過し得よう願ひ出があったことから、鎌倉幕府の手によって山越路の工事が行なわれた。いわゆる七切通である。しかし鎌倉城の城壁にあたる周囲の丘陵を通り易く改変することは城郭防衛上有り得ぬことと考へて、検討したところ、それら切通は戦時には独立の城郭として充分防衛の任を果すことができるように、構築されていることが明らかになったが、旭奈切通と名越切通以外は後世さらに手が加えられて、切通を中心とする独立城としての構造を残していないものが多いことがわかった。しかるに鎌倉と逗子の間にある名越切通は近年の広城宅造によって城郭としての遺構を全く失なった部分（注3）もあるが尚よく独立城郭としての構造を残していることが明らかになった（注4）。名越切通の城郭遺構調査後、逗子側から名越切通へののぼり道の構造が神武寺旧表参道の構造にきわめて似ていることがわかり、「神武寺は若しや城郭？」との疑がもたれるに至った。

そのきっかけとなったものは、神武寺旧表参道のある谷の入口部西側にある通称「堀の内」（桐ヶ谷政治氏宅所在地）とその背後丘陵先端の砦状部分の調査（注5）であった。その砦状地形を神武寺が自衛上計画した城郭の一部ではないかと考えたことから、神武寺境内および周囲に城郭遺構を探求した結果、意外に多くの城郭遺構の残存を明らかにすることができたものである。

山城調査は落葉時（12月～3月）のみが可能であり、雑木材や笹藪になっている丘陵を詳細に調査することは、頗る困難なものである。本調査は昭和56年から57年まで2ヶ年間にわたって赤星直忠・塚田明治・山田^{あづし}享史の三名が中心となって実施したものである。本来城郭の存在、特に防衛構造については記されないものであることを原則とする。記録にない故をもって城郭ないし防衛遺構を否定することは誤である。武器の発達・戦法の変化が直ちに防衛構造に変化を与えたことは当然である。防禦と攻撃は同時限的のものである。

本稿で城郭遺構と考へたものの中には、後世の地形変更（道路工事・開墾による山裾切断・山腹崩壊に原因する急傾斜など）があるかも知れない。尚執筆中、未調査部分があることがわかったが、今、追加調査できないから未調査としておいた。

調 査 の 経 過

逗子市内所在の文化財に関しては、逗子市文化財調査報告書第1集「神武寺」(昭和45年市教委発行)より、第11集「植物」(昭和56年市教委発行)に至るまで逐次、紹介されているところである。神武寺については、すでに第1集において総合的な調査が行われているが、本報告書は、城郭として神武寺を捉え、関連遺構、現在まで寺に伝わる歴史的資料等を2年間にわたり調査し報告するものである。

逗子市内には、中世城郭遺構として、鎌倉市との境にある名越遺跡、住吉城が知られているが、両遺跡ともに赤星直忠によって、発掘・地形測量などの調査がなされ、それぞれ報告書が市教委より発行されている(「逗子市名越遺跡」昭和53年・「住吉城遺跡」昭和54年)。神武寺の山中に所在する城郭遺構も、前記両遺跡とともに、以前より桐ヶ谷家(堀内)裏山遺構(逗子市文化財調査報告書第1集参照)などが知られているが、これらの遺構は、名越遺跡と同一時代に造られたものと考えられており、その関連性を明らかにするためにも調査が望まれていたのである。名越・住吉城の両遺跡は、開発による緊急調査であったため、他の調査に先行して行われたのであり、今回、ようやく神武寺に入ることができたのである。

調査方法は、遺構そのものが名越・住吉城跡に見られるものと同一的性格のため、地形測量を中心にを行い、並行して神武寺関係の歴史的資料の見直しと遺物の採集を行った。地形測量は、見通しの可能な落葉期に集中して行うことにした。また遺構の分布範囲が500m四方に及んでいるため、測量の前に必ず踏査を行い、遺構の所在を確認してから測量を実施したのである。遺構の大部分が山林の中に所在しているため、踏査にあたって誤認のないように地形図を携帯して常に所在地を確認しながら遺構の概要を記入し、測量調査はその地形図を基に順次実施したのである。

踏査は、赤星直忠が中心に行い、とくに東側区域に関しては、時間などの制限もあり、踏査のみ実施した部分が多く、略測にとどまってしまった。神武寺周辺は、良質の砂岩が産出されているため、江戸期より石の切り出しが行われ、その跡がいたる所で見受けられた。したがって踏査の際は、それらの石切り場と、城郭遺構との判別に関して注意を要した。今回の調査は、昭和56年度・57年度の2ヶ年であったが、踏査・測量に可能な時期が限定されており、実際に費した期間は7～8ヶ月程度である。遺構はすべて500分1の縮尺で作成し、遺構図としてまとめることにした。

測量のほかには現地での調査活動としては、遺物の採集を行った。各平場あるいは現池子参道奥にある井戸の周辺、こんぴらやぐら周辺などより、多くの陶磁器片・土器片(かわらけ)を採集することができた。これらの資料は、総数150点に及ぶものであり、時代考証あるいは当時の生活様式を知る上で貴重なものである。

以上、今回の調査は、神武寺周辺の地形測量ならびに現存する各資料により、歴史的考察を行ったものである。本来ならば、これらの調査にくわえて発掘調査を実施し、神武寺創建当時の全体像をも明らかにしていかなければならないものとするが、予算・時間などの都合により、発掘調査は、今後の機会をまつこととした。

神武寺山の地形と地質

神の岳を中心とする地形

三浦半島には横浜市・鎌倉市・逗子市・横須賀市・葉山町の堺を北から南に走り、三浦半島先端に達する脊骨丘陵がある。この脊骨丘陵中に鎌倉から横浜に越える旭奈峠がある。旭奈峠の南東3000mに鷹取山（標高139.5m。逗子市と横須賀市の堺）がある。鷹取山はこの付近での最高峰である。ここに述べる神武寺山は鷹取山から西に2000mのびて東逗子駅西北方に達する支尾根中の最高峰である。

神武寺山は神の岳（標高133.6m）とこんびら山（標高118.8m）の二高峰を山頂とし、幾つもの支尾根が南・西・北にのびる。神の岳と鷹取山の間は長さ300mに及ぶ標高100mばかりの馬背状尾根でつながる。神の岳から南々東にのびる支尾根は法勝寺の東方（沼間4丁目）まで700mのびて、上の谷入口に達し、こんびら山東山頂から南東にのびる支尾根は光照寺東方まで500mのびて神武寺旧参道入口（沼間2丁目）に達し、こんびら山中央辺から西にのびる支尾根は東逗子駅の北から西北方まで800mのびて、国鉄横須賀線近くまで達し、この支尾根から南および北に多くの短かい支尾根をのびし、こんびら山から西北方にのびるいくつかの支尾根とともに神武寺山の西方裾を形成していた。（東逗子駅北方から西北方にのびる支尾根の北側部分とこんびら山の西側にのびた支尾根はすべて尾根近くから削平されてアザリエ団地——池子2丁目・池子3丁目——になったから、この地域に存在した支尾根が神武寺城遺構と如何なる関係にあったか全く不明である。）

こんびら山頂部は中程から北西にく字形に折れた形を示し、その先端裾は逗子中学校の西、鷹取山登山口に達する。こんびら山北東側斜面には多くの短かい急傾斜支尾根がのびて、逗子中学校のある小池谷戸の南東部を形成する。神の岳東端から北西西に約950mのびる支尾根は逗子中学校背後に達し、県立逗子高等学校のある阿弥陀谷の南側尾根になる。

神の岳を中心とする地質

神の岳を中心とする神武寺山の地質について、「逗子地域の地質」（注6）は「逗子市域の丘陵地は新第三紀の地層から構成され、最も高い山は葉山町の堺界稜線上にある二子山（207.9m）であり、その他の丘陵頂部はすべて80m～160mの高度範囲に含まれ、丘陵地は全般的にかなり開析の進んだ地形となっている。」と説明し、「逗子市域を構成する主な地層は新第三紀の堆積岩で、下位から葉山層群・三浦層群・上総層群の三つに区分される。」「三浦層群は逗子シルト岩層と池子火砕岩層の二累層から構成される。」と説明する。鷹取山から西にのびる丘陵（東逗子駅の北方丘陵）もこれである。

東逗子駅の北方につらなる丘陵の大部分が「逗子シルト岩層の上に池子火砕岩層が重なっているものであり、層の走向はほぼ東西。傾斜は20度～30度が普通であるがアザリエ団地周辺では断層が多数走り、層が細かに分断された構造を示し、傾斜も一様でない。」と説明している。

神武寺薬師堂・山王社からみろくやぐらのある墓地・客殿南の切割外にある東西に長い平場からこんびら山全域を含み、逗子中学校裏の丘陵に至る一帯には逗子シルト岩層の上を覆う池子火砕岩層がひろがっている。山王社背後に絶壁状周辺をもつ神の岳があるが、神の岳を含み親不知から鷹取山

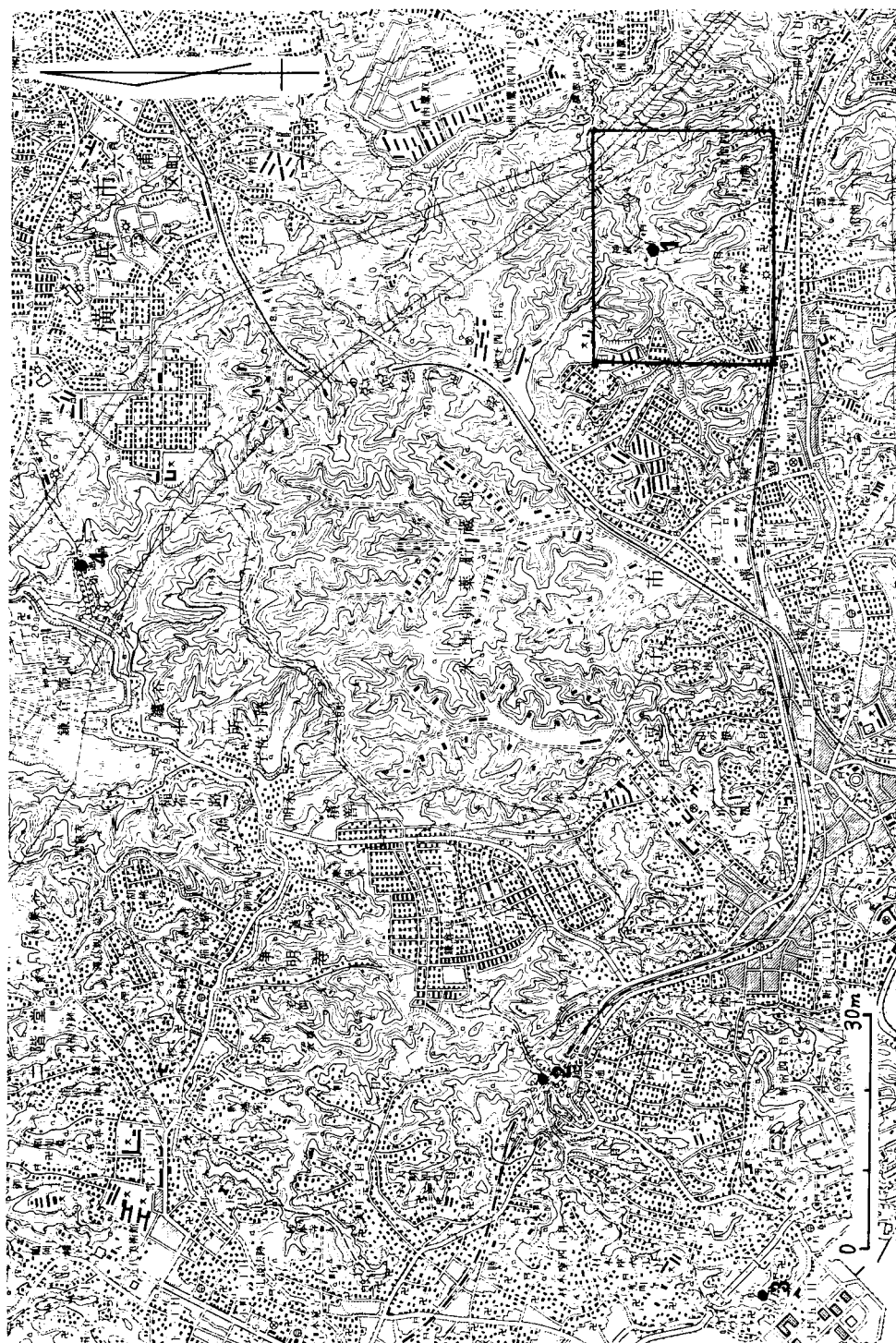


図1 神武寺の位置(1)と付近の地形(2.名越切通 3.住吉城 4.朝比奈切通)

に至る地域は池子火砕岩層中の上部にある火山礫凝灰岩層であり、上部にある火砕岩層中下部にある凝灰質粗粒砂岩を覆うものである。

沼間一丁目の南側丘陵上から神武寺丘陵を遠望すると山頂標高70~80mの丘陵上に横長の二つの瘤が二子山形に高くそびえてみえるのは、こんぴら山と神の岳であって逗子シルト岩上を覆う池子火砕岩層が浸食作用をうけ、わずかに残った部分の山頂部なのである。

神武寺における域郭遺構

神武寺に城郭遺構の存在

神武寺旧表参道と思われる路が南側の谷（げないぼう）にある。谷の出口は沼間2丁目（沼間4丁目との堺）。もとのあたり一体を「ぶどうやしき」といったという。谷出口東側尾根先の東側には法勝寺（沼間4丁目）がある。西側尾根先には旧家桐ヶ谷氏宅（家号堀の内）がある。宅地南方を南東から北西に矢の根川（田越川上流）が流れ、東側にはげないぼうの谷からの小流が北から

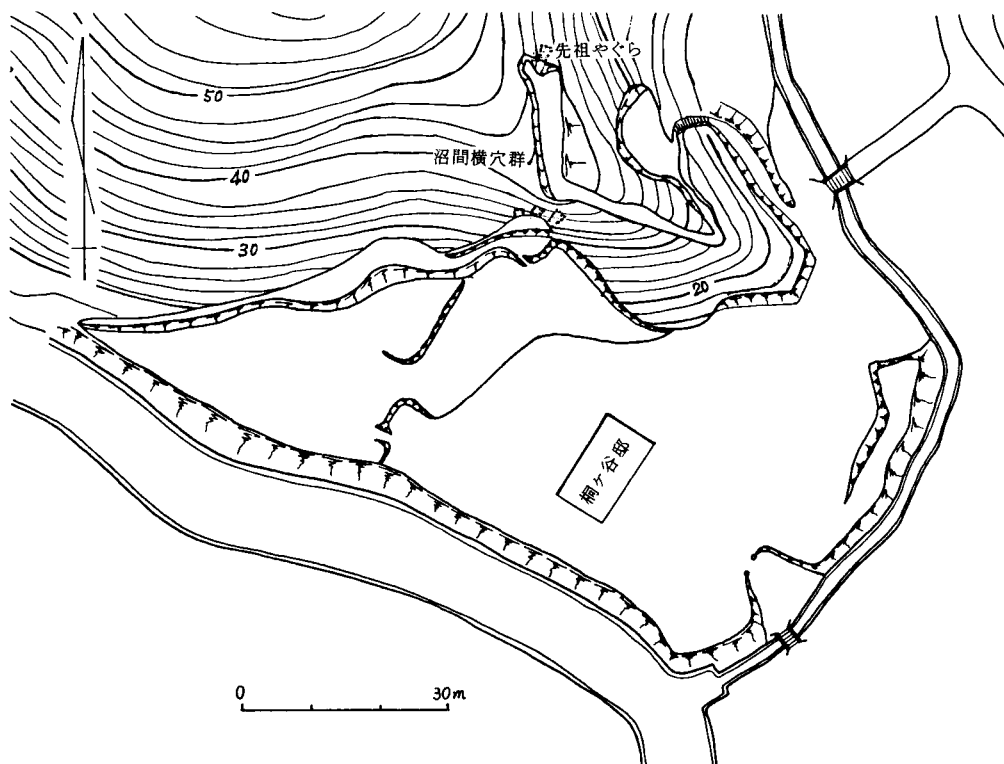


図2 桐ヶ谷邸(堀の内)

南に流れて、桐ヶ谷氏宅南で矢の根川に合流する。桐ヶ谷邸はこの二川の合流点にあって、東と南の川が堀の役目をしたから、この地を「堀の内」と呼んだのが今は家号になっている。二川は背後にある尾根先（南西部と東部）で裾に接するから、邸地としては要害地であり、もと邸地の川に臨む周部分には土塁がめぐっていたらしく、南側土塁は失われたが東側の一部が残っている。桐ヶ

谷邸背後尾根には人工が加えられた要害としての遺構がある。堀をめぐるした桐ヶ谷邸と深い関係にあったらしい。昭和45年「堀の内」について調査し、背後丘が小形ながら砦として作られており、防衛遺構が尾根基部にまで存すること（注5）からこれを単なる「堀の内」付属の砦と考えるべきでないと考えさすに至り、あるいは神武寺が自衛上の目的をもって城郭としての構造を持つものであったかも知れないと考えるに至った。かくして他の部分にも城郭遺構を求めた結果、沼間側（げないぼうの谷）からの旧表参道の登り口構造が逗子側から名越切通への登り口構造と全く同じであることがわかり、次いで神武寺境内各所に城郭遺構と思われるものの存在がわかり、神武寺に城郭遺構が存在することが明らかになったものである。以下確認された城郭遺構を説明する。

城郭遺構の説明

（1）神の岳

神の岳山頂部は露岩の平場からなり、東側山腹から南側山腹にかけては風化崖が絶壁状をなし、特に南側には岩陰状部分もある。西側および北側斜面には樹木があるがきわめて急傾斜で登攀は困難である。このような周辺の絶壁状または急傾斜部の高さは薬師堂平場から30m～35mにおよぶ。

現在、神の岳西南急山腹下には薬師堂平場があり、その西端から神の岳へのS字状登路があるが甚だ急である。このS字状路は鷹取山ハイキング路として戦後作られたものであるが、S字路にそって山腹に狭い平場と切岸を繰り返した旧登り路のあとらしいものがある。おそらく神の岳登攀の唯一の路だったと思われる。

神の岳西端から西に下る支尾根は西にむかって幾段かの平場と切岸を連続した防衛遺構があったらしいが、この部分には第二次世界大戦における軍施設が構築されたあとがあり、大きく破壊されているから、以前の地形は不明である。

神の岳南東山腹絶壁下には南南東にのびる尾根の基部があり、南東側絶壁下には南にのびる尾根の基部がある。また東北側急山腹下は鷹取山につづく尾根となり、また北西にのびる尾根となる。西側急傾斜山腹は短かい尾根となって庫裡・客殿平場の北側の支尾根となる。

南西側山腹下は薬師堂および山王社のある尾根となって、旧表参道の支尾根となり、西に分岐してこんびら山につづく。

（2）こんびら山

こんびら山と神の岳との間とはぎれているがもとは一つづきの尾根だった。こんびら山は神の岳の西端山腹から南にのびる支尾根（薬師堂および山王社のある尾根）が楼門下から西に折れ、更に北西に折れた先が高くなった部分



図3 神武寺山遠望
（左、こんびら山 右、神の岳）

であり、高い部分は西にのび（長さ120m）、更にその先が北西に折れて（長さ340m）くの字形になる。こんびら山頂も露岩よりなるが長い頂部尾根（約460m）に高低がある。山頂部にはわずかの平場部分もあるが多くの馬背状である。その南面から西南面にかけて、および北面から北東面にかけては絶壁状または急傾斜（樹木が生えている）をなし、登攀できないが尾根西北端部稜および東端部の北東側稜と南側稜はいくらか緩傾斜であり、登攀できなくはない。

こんびら山西北端は馬背状尾根であり、尾根端に大露岩があり、大露岩の西北から尾根は下り尾根になる。ここに西北側登り路がある。西北尾根の馬背状を少し南東にたどると露岩上に達し、露岩の南東側は急に低くなって鞍部となる。南東側前面尾根は高く、頂に平場がある。この平場への山腹は急傾斜である。（今はこの急傾斜部分に狭く長い石段があつて頂に通ずる。）この急傾斜山腹に二段の狭い平場がある。山頂は径10mほどの平場であり石造社（破壊）がある。こんびら社であろう。

この平場がこんびら山最高位置であり、最大平場である。周は絶壁状又は急傾斜である。尾根は南東側に急傾斜で低くなり、鞍部をへだて登り尾根となって露岩の高い尾根につづく。露岩部分の一つの頂となり、南側および北側は絶壁状となり、南側絶壁下から南西にのびる支尾根

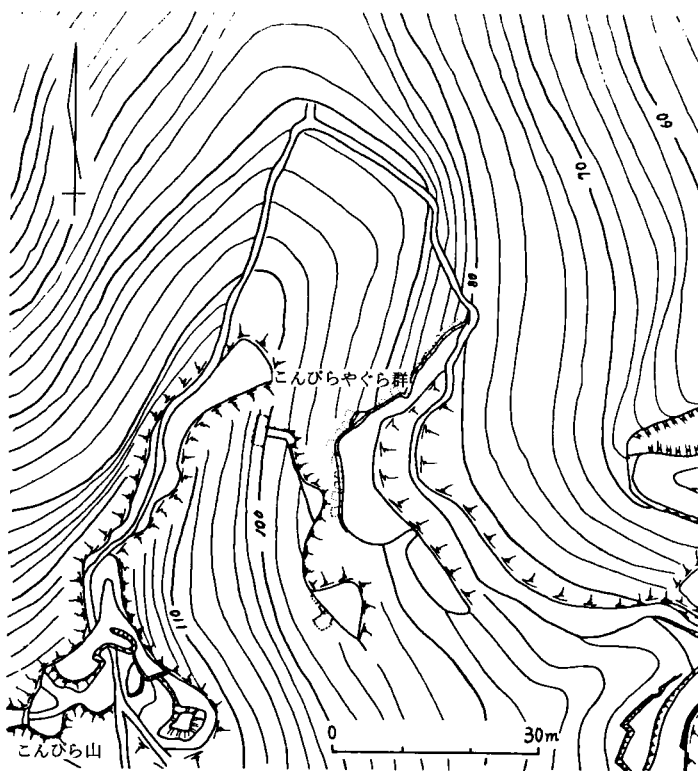


図4 こんびら山とその東側遺構

がある。この支尾根は東逗子駅の西北（桜山中原橋から池子十字路口に通ずる路の東側にのびる丘陵）にのびる低尾根となる。（東逗子駅西側を鉄道を横切って南北に通ずる谷路がこの支尾根に達するところに神武寺トンネルがある。）露岩の山頂は東にのびてこんびら山東端山頂の露岩につらなる。露岩の南側および北側は絶壁状をなし、これら絶壁状露岩付近には石切あとが各所にある。何れも後世のものであろう。こんびら山東端山腹は急傾斜であり、登攀困難であるが、北東側下り稜と南側稜がやや緩やかであり、現在の登り路もここにある。

（3） こんびら山東端

鐘楼南西下平場の北側中央辺に神武寺駅からの裏参道への下り口がある。その20m西に同じ北側への路がある。こんびら山北東稜への登り路の入口である。この路はこんびら山東端山腹を中腹にそって北西に通ずる細路で、入口から25mばかり進んだあたりから左上4mほどの山腹に作られ

た平場が南北に35mも続いており、山腹路の頭上から防禦の投石が可能なきわめて有力な防禦平場である。(この防禦平場の北半山腹には20穴からなるやぐら群(こんびら山やぐら群)が存在するから、この平場が中世のものであることは確実である。)この防禦平場の上部山腹6mにはこの平場が敵手にわたったとき、更に上方山腹からこの平場を攻撃できる馬蹄形平場がならんで二ヶ所にある。上方馬蹄形平場へはこんびら山北東稜の緩傾斜平場下端から山腹を通して達することができる。南北に長い防禦平場(やぐら群のある平場)下の路は頭上の平場がとぎれた先から山腹ぞいに45m進んだところで、北東稜を下る路にT字形に合する。(この稜下部山腹は地形上当然、防禦遺構が存在すると思われるが雑木林と笹藪とで調査できなかった。調査未了。)この路をのぼると約30mで稜を削平した傾斜平場端に達する。この傾斜平場は下端幅6m、上方に次第に狭くなり、40mで平場が終り、前面頭上にその上の平場が覆いかぶさる。上の平場はこんびら山東端大露岩につづく部分である。

こんびら山東端防禦拠点は、この大露岩とその南につづく大露岩を中心にその周に平場をめぐる部分である。

当然考えられる海宝院の谷からの攻撃に対する防禦遺構と考えられるこんびら山南東中腹を、北東方ダイラクボ尾根基部から南西方車地藏のある山端まで長



図5 こんびらやぐら群と平場

く山腹なりに営まれた平場を前面としたこんびら山東端南側稜の下半部には、下の長い平場に並行に車地藏背面の切岸上から約50mにわたる傾斜平場があり、その上部稜には四段に重なった平場(長さ13m・25m・20m・20m)が山頂防禦拠点にまで存在している。

神武寺山の二つの山頂は味方が敗退した場合、その何れかに立籠って最後の決戦ができるように準備されたものであろう。

(4) 薬師堂・山王社平場

薬師堂と山王社のある平場は神岳西端の急傾斜山腹(約30m下)から南にのびる支尾根頂を削平したもので、平場は神の岳寄りを底辺(幅約55m)とする三角形(高さ約55m)平場をなし、神武寺の中心的部分であるとともに神の岳防衛の前面中心部分である。この三角形平場の背面は神の岳である。背面は高さ30m～35mの急傾斜で、三角形平場の東南縁(長さ約60m)はその下に南から入り込む狭谷奥の谷底まで急傾斜(比高35m)山腹をなし、西南縁(長さ約60m)はその下の南前面に位置する墓場平場との間に直角に切り落された切岸(比高約15m)があり、西前面に位置する客殿所在の平場との間に急傾斜山腹(比高13～14m)が存在するから、楼門西南前方に位置する鐘楼のある狭長な土塁状尾根(長さ約50m)を通過する以外に薬師堂平場に攻登る途はない。

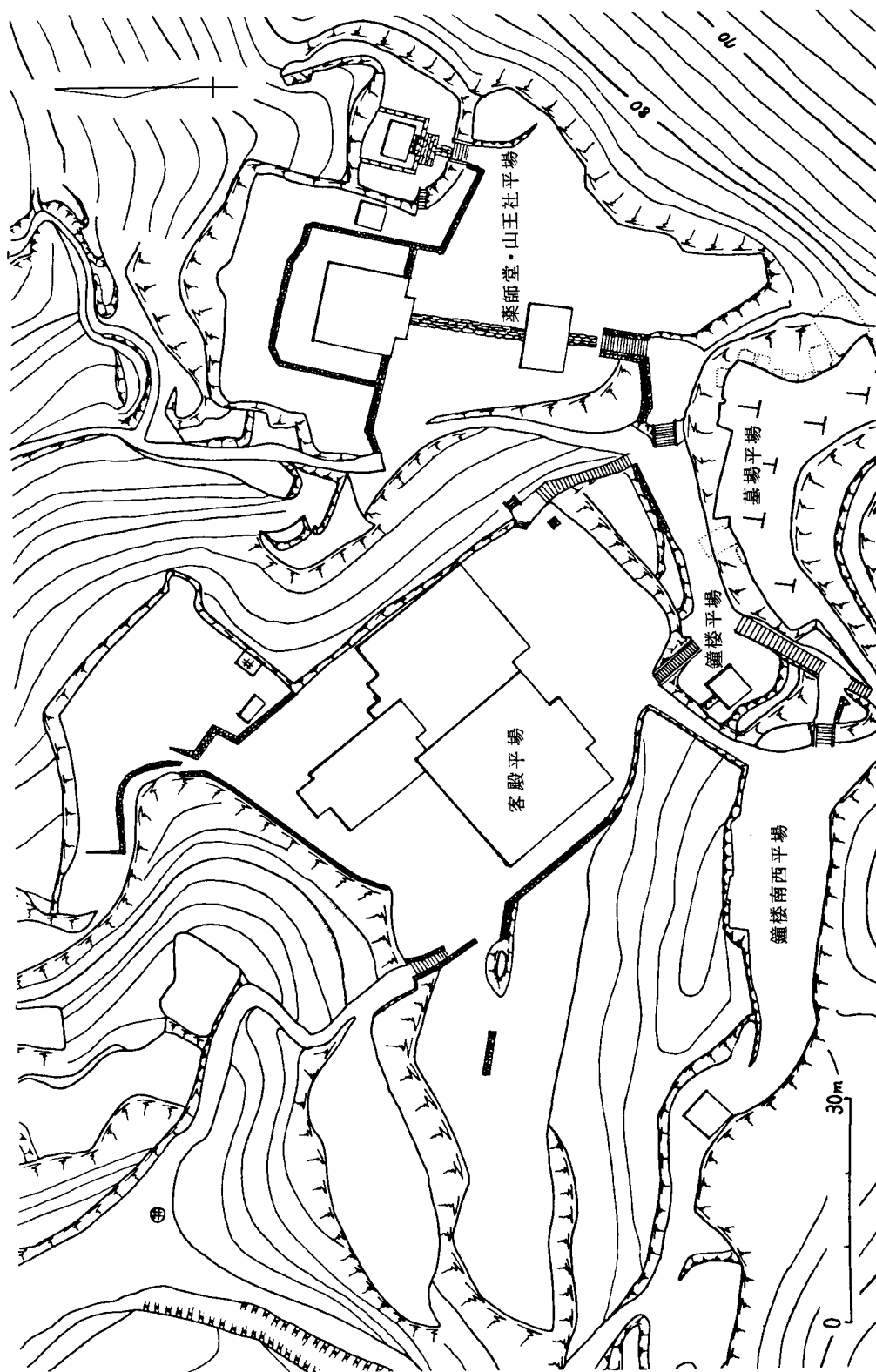


图6 神武寺中心部平場群

(5) 鐘 楼 平 場

薬師堂平場南端（三角形平場の頂点）は二つに分かれ、東側尾根は南にのびて旧表参道のある支尾根となり、西側支尾根は深く削平されて楼門前石段下の平場の南西につづく鐘楼のある狭長平場（長さ約50m、最狭部幅4m）となる。この支尾根は鐘楼のところから西に折れて客殿の南側尾根となって、こんびら山南東山腹につらなる（この間約100m）。鐘楼のところから南に分れた小支尾根（約40m）は鐘楼南下公衆便所のある平場（小支屋根頂を削平したもの）となる。

(6) 客 殿 平 場

鐘楼のある狭長な平場の北西下（比高約7m）に客殿と庫裡のある平場がある。鐘楼平場崖下の長さ25mを底辺とする高さ55m、上辺長さ40mの逆台形。この平場の北には薬師堂平場の北西端から北西にのびる神の岳西端支尾根がある。客殿平場は神の岳西端支尾根と鐘楼平場南西端から西に折れて、こんびら山南東山腹につづく東西方向支尾根とにはさまれた谷の谷頭部分に位置する。従って客殿平場は北西にひらく谷の谷奥に位置することになる。前面谷底は狭谷をなし、神武寺駅方面からの神武寺裏参道になっている。即ち神武寺攻撃の裏正面であるから当然この部分に防禦遺構が存在しなくてはならない。

客殿平場そのものの北側には神の岳西端支尾根があり、東側には薬師堂平場から鐘楼平場にわたる尾根削平平場があり、南側には鐘楼平場南西端から折れてこんびら山南東山腹につらなる東西方向尾根がある。客殿平場はそれら尾根に囲まれた山腹の中段部分を削平し、谷奥を埋めて作られたものであるから、北西前面の開く摺鉢底といった形の平場である。したがって敵が背面から攻め寄せても、直接客殿平場には入ることができない。

裏正面である狭谷を攻め入ることは当然考えねばならぬが狭谷底の半分は溪流である。裏参道としてまたハイキング路として溪流沿いの道をひろげているが、中世の狭谷底は溪流だけの流路だったはずである。防禦施設としては恐らく溪流からの登攀可能な支尾根先は皆、高さ2m～3mあたりから切りとられたすそ切になっていたろうし（現在すべての尾根裾はすそ切されている）、それら支尾根間の小谷も登攀可能な部分は削りとられて急傾斜山腹またはすそ切形になっていたと思われる。中世には溪流わきをわずかに通る細道が存在したと考えられ、それが後世上げられて現在の裏参道になったと考える。

逗子中学校南側を南東に通る裏参道がこんびら山東端から北北東にのびる支尾根裾と神の岳西端から北西にのびる支尾根裾と相対する地点で南折し約15m進むと、客殿北西下の谷間にある大井戸地点に達する（現在裏参道はこの地点で南南西に分岐して急山腹を登っている）。裏参道は狭谷の溪流路を通路にしたものである。神の岳西端からの西北支尾根先は急傾斜で登攀困難であるが、大井戸に近い南半はやや緩傾斜であるから登攀可能である。この緩傾斜山腹部には大井戸の北東側から客殿平場への登り路北側山腹にかけて、数段に重なる平場と切岸をかまえ、最も重要と考えた部分には平場と切岸が五段に重ねて設けられている。その長さ約180mにわたる。また大井戸の南側、客殿平場の南西から西につらなる山腹には裏正面の敵を目の下に見下ろす三段の大平場が設けられており、この大平場は客殿平場と共に表正面からの攻撃に対する本陣として、また予備軍のたまりとしての十分な広さを持ち、名実ともに客殿平場が神武寺城の中心であったことを物語る遺構である。

(7) 庫裡北西平場

客殿庫裡平場(客殿平場)の北西につづく平場は神の岳西端より西にのびる支尾根の南西側山腹に作られたもので、客殿平場の西南端から大井戸所在谷底に下る路があるが、この下り路を前面に見下す位置に南南東から北西西に底辺をもつ台形平場(南東辺20m、北西辺5m)があり、これにつづく山腹に北西に長く二つの半月形平場(長さ30m)がある。この二つの半月形平場前面下に大井戸があり、この部分に五段に作られた平場群がある。この二つの半月形平場の北西にはなれて狭い

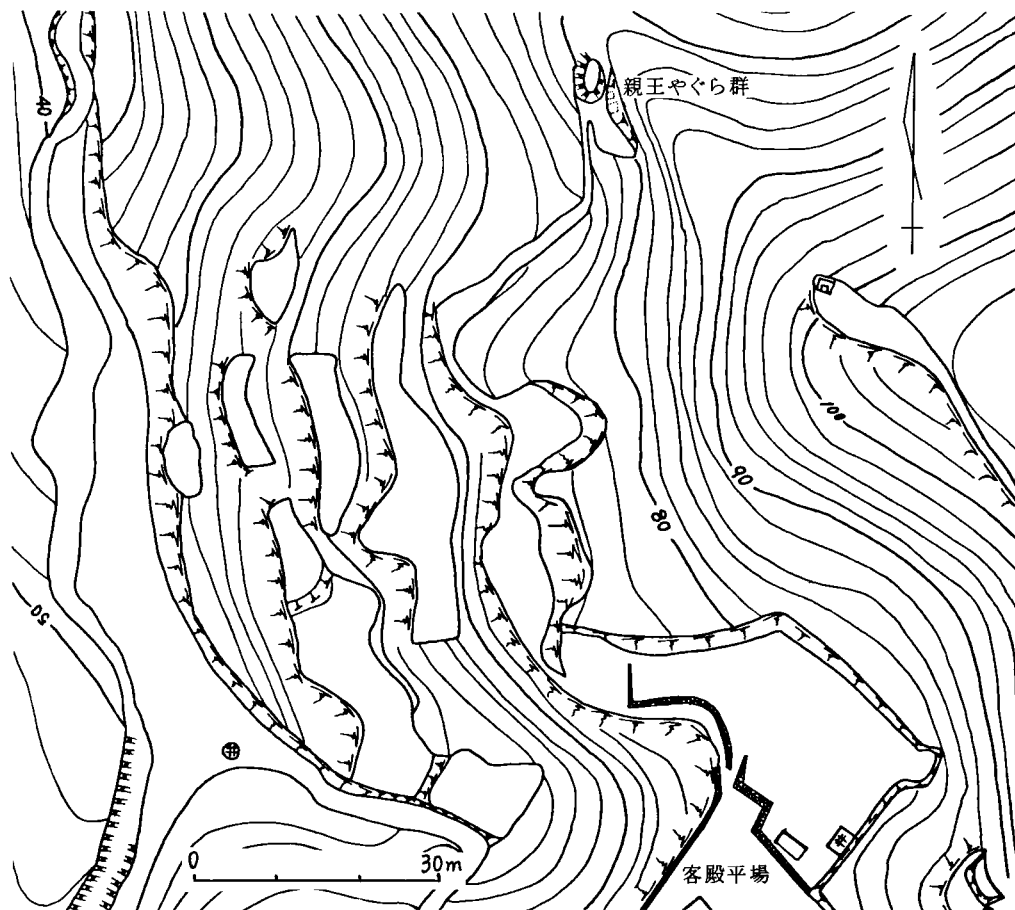


図7 庫裡北西平場

半月形平場がある。この平場が尾根最先端平場の南西側山腹平場である。

(8) 庫裡北側尾根

神の岳西端より西にのびる支尾根である。神の岳西端より西に下る支尾根としてのび、中途から北西に折れてその裾はこんびら山東端から北北東にのびる尾根下り稜の裾と鼻をつき合わせる形で裾を接し、その間に逗子中学校南側を南東に進む裏参道が到着しており、路はここで南折して支尾根先を大井戸に達する。

本支尾根は神の岳西端から西にかなり急傾斜でのび、支尾根頂は幅広であるが、そのあたりから先

35mほどは幅10m～7mと狭くなり、その先は幅5m～2mと甚しく狭くなる。

本支尾根の中部東寄りの約50mは第二次大戦に海軍部隊の陣地として構築された部分であり、かつ東側および南側は石切場跡が大きく存在し、中世城郭遺構の存否不明である。中世城郭遺構は本支尾根の西半部（約60m）にのみ残る。遺構の残る部分の東半約20mは尾根先に向って自然の緩傾斜ともみられる部分であり、その北側および南側は山腹に向って急傾斜に切り落してある。その先45mは狭い尾根に高さ1m～2mの段差をもつ9段の狭い平場が連続しており、それら平場が山腹にのぞむ部分は急傾斜に切り落してある。最先端平場先の急山腹は尾根裾に至る。これら尾根平場には削平工事中露出した大岩がそのまま残されて平場間の段差の役目をしている。最先端平場の南西側山腹には庫裡北西山腹に作られた最先端平場がある。

（9） 鐘楼南西下平場

旧表参道のある「げないぼう」の谷の谷頭をめぐる、鐘楼南西下の平場がある。攻撃正面になる谷が最も防備が嚴重であるのは当然であろう。客殿南側にある尾根は鐘楼の平場南西先から西に折れて、こんぴら山南東稜中腹につづく支尾根であり、尾根部分の南側を尾根ぞいに東西に切りひらいて平場にしたもので、鐘楼南西下平場と前述した大平場であり、その東端は鐘楼南方にのびる小尾根を削平した共同便所のある細い平場につらなる。この小平場は鐘楼平場への登り口であり、墓場平場への西端であり、旧表参道の到達点でもある。鐘楼南西下平場はげないぼう谷の谷奥にそ

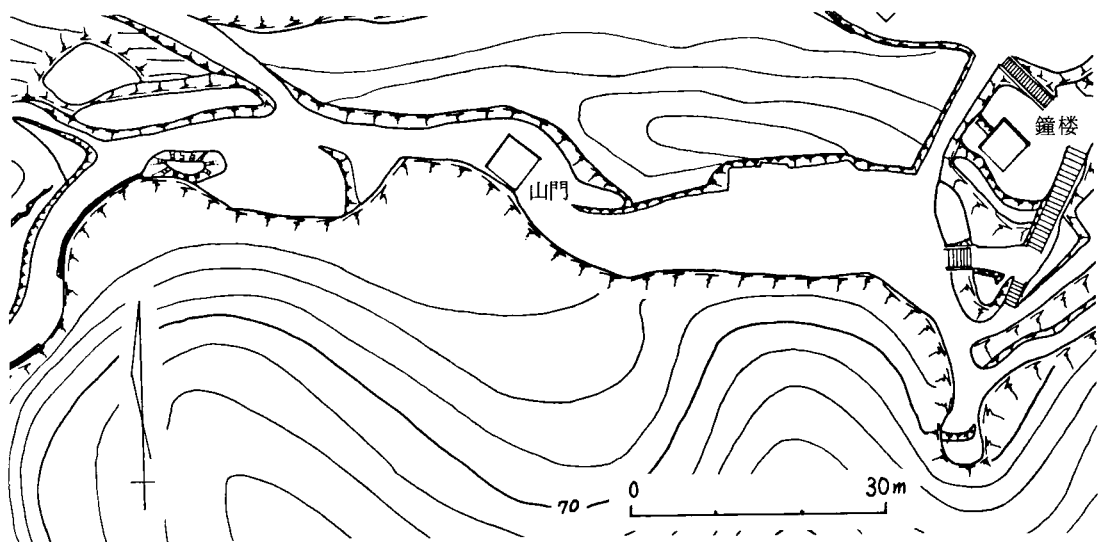


図8 鐘楼南西下平場

って南に口を開く弧状に作られており、鐘楼南西下が最も広く、長さ40m、東端の幅14m、西端8m。北西に折れ、更に西に折れ、こんぴら山への登り口あたりまで長さ約60m。幅は広い部分で13m、狭い部分で3m。こんぴら山登り口辺で南西に折れて幅3m～4mと狭くなる。長さ約60m。南西端は「ダイラクボ」尾根の基部に達する。本平場全長約180m。本平場が谷にのぞむ部分の山腹は急傾斜であり、登攀困難である。

鐘楼南西下平場の南西端は更にダイラクボ尾根基部を浅く切り割った部分をのりこえて、ダイラ

クボ尾根基部の南山腹をまわり、こんびら山東端から南に降る稜の中腹（車地蔵のある地点）まで、山腹にそって南西から170mのびている。それは海宝院の谷奥がこんびら山東端の南下に深く喰いこむ部分であり、こんびら山東端の南下側中腹に、谷奥線にそって、延々と作られた防衛平場である。

その長い平場の山際は直角に近い切岸の延々たる絶壁であり、海宝院谷から急傾斜山腹をよじのぼって、この平場に到達したとしても、この切岸の長い壁にさえぎられてすぐさまこんびら山にとりつくことはむづかしい。海宝院の谷からの攻撃に対しての防衛構造としては当然有効な遺構である。

現在、海宝院の谷奥はきわめて急傾斜山腹になっているし、山すそはすそ切されている。また谷奥の東側山腹も急傾斜である上、その上方にダイラクボ尾根基部の嚴重な防衛遺構が存在し、更にそれにつづく瘤部と瘤部南西支尾根遺構の存在は海宝院谷からの攻撃に対する防衛をも兼ねたものと考えてよからう。

(10) ダイラクボ尾根

こんびら山山頂東端から南東へ降る支尾根稜が中段で東西に設けられた山

腹ぞいの長い平場でたち切られた部分が、南東方にのびるダイラクボ支尾根の基部である。ダイラクボの名はこの支尾根先に近い部分にある凹部の呼び名で、おそらくダイグラボッチ足痕伝説地の一つであろう。かつて（注5）支尾根先端下にある「堀の内」（地名・家号）追求中に背後丘のダイラクボが城砦の一部と気付き、それをヒントに「神武寺城の存在」に発展したものである。

ダイラクボの尾根は基部の堀り切り部から南東に約450mのびるやせ尾根。基部と先端裾との比高70m。基部から160mばかり南東に鞍部をへだてて基部と同高の最も幅広い瘤部分があり、ダイラクボ尾根は瘤の南東から南東にのびる尾根であり、この瘤からは別に南西に分岐する支尾根（先が二つに分かれる）がある。

ダイラクボの尾根は瘤の南東からやせ尾根となって約200m。尾根上が幅広になった部分の先が急に低くなり、その先が径60mばかりの緩傾斜頂をもつ丘となって終る。ダイラクボをはじめ防衛遺構とみられるものの主要部分はこの頂部に残っている。ダイラクボ尾根の全山腹はいずれも急傾斜の自然要害地である。瘤部分の200m南東先にある幅広部分は幅7～8m、長さ20mほどの平場で周が山腹にむかって急傾斜に切られているほかは何ら遺構はないが、尾根先端からS字状に降る



図9 鐘楼南西下平場近景

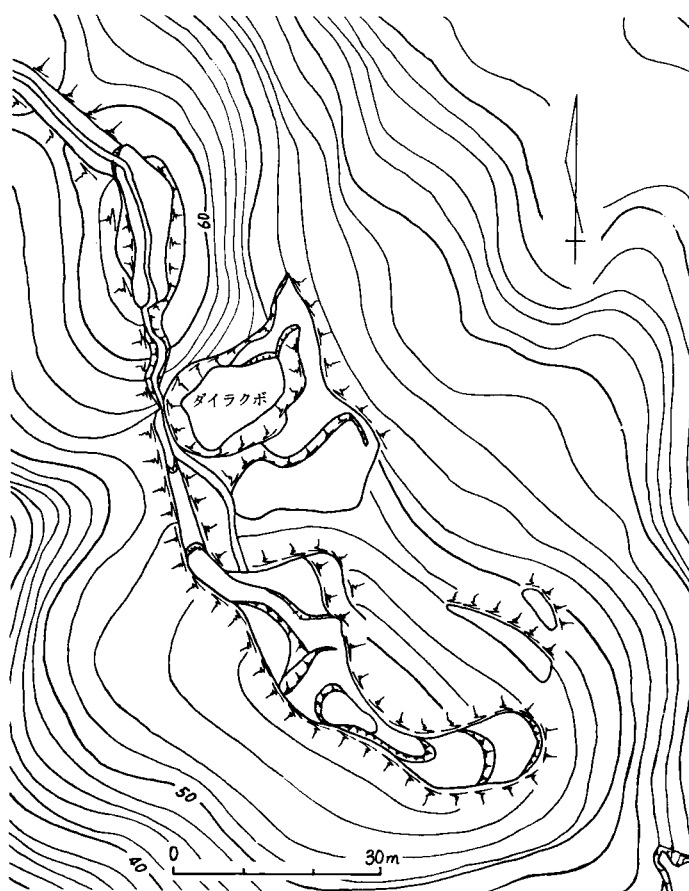


図10 ダイラクボ尾根中心部

急傾斜の細路があり、先端部を深く絶壁状に切り落とし、尾根を横切る幅10mほど、比高14mばかりの空堀状を作り、南西部を切り残して土塁状とし、土塁状がS字状降り路と空堀状部分の南東にある平場群との通路（高さ約2m、上幅約1m）になっていたようである。空堀状部分の北東側は土塁状に切り残し、土塁状の北西端が幅1mほどの通路になっている。この内部が楕円形（長径17m、短径9m）に凹部になっている部分がダイラクボと呼ばれるところである。大空堀としての遺構ではあるがこの部分に防衛拠点として必要な建物があつたものであろうか？。

大空堀状部分は北西上の高い平場と、その南東側にある緩傾斜丘との間の鞍部にあたる。

この緩傾斜山頂部は北東面山腹がやや傾斜がゆるやかであるほかは他の山腹は急傾斜であり、それら急傾斜山腹は登攀困難である。したがって防衛遺構は、このやや緩傾斜をもつ山腹面を攻撃正面と考え、これに対して長さ80mにわたる横長に幾段にも重ねた小平場を配している。しかしこの緩傾斜丘上ではどんなに嚴重な逆茂木をかまえても長時間の抵抗は不可能であるから、大空堀をもって防禦した尾根先に退き防衛することになる。瘤部分に至るやせ尾根は防戦に至れば各所で切り割ることが可能である。瘤の南東裾に接するやせ尾根部は空堀として切り落される第一予定地であろう。

瘤部分には何らの遺構もないが頂部の緩傾斜以外の山腹は北面と南東面だけは緩傾斜であるが他は急傾斜である。当然この部分で敵を喰いとめる予定であつたと考えねばなるまい。

やとのそら西尾根——瘤の南南西山腹は南に60mほどのびたところで西と南南東に分岐する。分岐点と瘤との間にわずかな鞍部を作る。南南西支尾根は分岐点から先端裾まで120m。この支尾根とダイラクボ尾根とに挟まれた谷は「やとのそら」と呼ぶ。西の分岐支尾根は50mほどのびたところで南西に折れ、110mで尾根先端になる。南南東にのびた支尾根と西→南南西支尾根とに挟まれた部分に一つの谷を挟む。西→南南西支尾根の西側は海宝院の谷である。

瘤の南西山腹から南にのびる尾根鞍部は東西に傾斜したかなりの平場であり、平場の東縁は「やとのそら」の急山腹に向って急傾斜に折れ、西縁は西側急山腹（海宝院谷の最奥部）に向って急傾斜に折れる。南方尾根は50m先の頂が幅5m余のやや広い平場となったところで、これを分岐点として南南東に折れるが、尾根頂は2m～3m幅で次第に尾根先に向って低くなり、50mほど先で径10mほどの丸い平場となり、更に南南東にのびるがここで高さ1.5mほどの切岸二段をもってその先の平場と堺する。その先の平場は長さ10mほど（幅6～7m）で終る。その先は自然の傾斜尾根となり遺構はない。これら尾根頂の削平部は急傾斜山腹との間が急傾斜に折れ曲る。本尾根の側面山腹は急傾斜であるため、「やとのそら」から尾根への登攀は困難である。

西に分岐した支尾根は海宝院谷の東側尾根になるものであるが、この尾根の遺構存否は未調査である。

瘤の南裾は「やとのそら」の谷である。東側のダイラクボ尾根の西側山腹も、西側尾根の東側山腹も下半が特に急傾斜で登攀困難である。谷奥には数段の平場と切岸があるが中世からのものであるか、後世畑として開墾されたものか不明。谷奥からS字形に右折して尾根に通ずる急傾斜路があり、山腹上部に狭い緩傾斜平場があるが、中腹以下は急傾斜であり、登攀困難である。

瘤以北——この瘤部分はダイラクボ尾根の中央部にうづくまる緩傾斜（北・南東・南西の三方がやや緩傾斜、その他は急傾斜山腹をもつ自然地形）瘤である。瘤はダイラクボ尾根基部から南（微東）へ150mにある。基部堀り切り部での東西幅約15m。基部から南へ約50mまでが三角形状をなし、大体同じ高さ（標高84.5m内外）、その南部が高さ5mくらい急に低くなり、南方の瘤頂までの間が鞍部（鞍部中央部で約8m低くなる）となり、その間が狭い尾根となる。古くは尾根伝いの路が瘤頂を経てダイラクボのやせ尾根路につづいていたと思われるが、現在ハイキング路は鞍部から南東へ急山腹をまわってダイラクボ尾根のやせ尾根に通じている。

鞍部の東山腹はやや緩傾斜であり、神武寺旧表参道のあるげないほう谷の最奥部西側山腹に位置する。したがって表参道に殺到した攻撃軍は谷奥の急傾斜山腹下に立ちどまらざるを得なくなり、何とかかなりそうな谷奥西側山腹に無理やり攻撃を仕かけるに違いない。防禦軍としてはこの緩傾斜面に防禦の全力をつくさねばならなかったはずに違いないことは、山腹裾の急傾斜部の上に山腹の凸凹にそって作られた大小の弧状平場群が七重にも八重にも積重ねられたあととして残り、この山腹が平場と切岸と自然山腹との繰返しによって防衛せられていたことを物語っている。攻撃軍がこの山腹に攻めのぼることができても、長い鞍部の狭い尾根を占領できるだけで、その北方にある尾根基部先端との間に高さ5mの絶壁状ないし急傾斜山腹があるから、ここで喰いとめられ、絶大な損害をうけねばならないであろう。（鞍部東側山腹には12所の平場群があるが平場相互の関係、広さ、高さ等については繁雑であるから記述を省略する。図によって判断されたい。これら平場群の全貌撮影は樹木があって不可能であった。）

基部の切り割り部——ダイラクボ尾根基部にはこんぴら山東端にある南東稜の裾との間に、基部を横切って上幅5mばかりの切り割り（深さ1.5mばかり）部がある。この切り割り部は尾根基部の空堀部であり、基部の東側および西側に長く山腹にそって存在する平場をつなぐ交通路を兼ねたものだったともみられる。切り割り部の北方には尾根頂面を削平した平場があり、その北側には山

腹裾との間に平場を横切る幅5m余の空堀が現存する。

(11) こんびら山東端南下支尾根

こんびら山東端南側中腹にある長い長い平場の南西端が車地藏のある崖部分に達していることは前述した。この部分はこんびら山東端中腹から南西に400mのびる支尾根の基部に当る。この支尾根裾（標高20m）は東逗子駅北側近くにせまるもので、現在大洋漁業東逗子寮・紅葉台マンションその他多数住宅がある丘陵である。神武寺新参道がその丘陵の北側山腹を切り割って西から東に登る路として作られている。戦前には登り口に「神武寺」と大字を刻んだ凝灰岩の角石がたっていたがいつかなくなった。神武寺南正面の尾根を南から登る路が中世以来の旧表参道だと思っていたから、西から尾根をのぼるこの路は後のものと漫然と考えていた。神武寺に防御遺構がある以上、城郭だったと考えられるから、現在の登り路そのものは後世のものであるとしても、西方からこの尾根を攻撃することは当然考えられねばならない一つの攻撃路だったはずである。紅葉台マンションや太洋漁業の寮その他が作られる以前、この尾根にどのような防御遺構があったかは、今となっては全くわからないが、紅葉台マンションの東側にある丘陵の頂部は支尾根上の一つの瘤部分（標高65.2m、山裾との比高45m）である。頂が大体平らであり、周山腹は急傾斜である。それから南にのびる短い支尾根は海宝院境内の西側丘陵に当る。尾根南面下部は何段かになった墓地であるが中腹以上は自然の山腹である。丘陵すそはすそ切になっている。海宝院の谷からも攻撃されることは防禦側で当然考えたことだったから谷奥に当るダイラクボ尾根基部西側から、谷奥をめぐる山腹北側であるこんびら山腹を削平した長い長い平場が作られている。

ところがその長い山腹平場の南西端が車地藏のところで終わってしまった。車地藏のところはそこから南西にのびる支尾根の基部であったから、平場の端から支尾根基部を横切って高い切岸が作られた。切岸下から南西にのびる支尾根頂は海宝院谷側を土塁状に切り残した平場が170m先の瘤まで作られたのである。瘤の周山腹は急傾斜だった。この瘤は南西尾根（マンションのある尾根）からの攻撃に対しても、海宝院の谷から急山腹を攻めのぼる敵に対しても、喰いとめねばならぬ防御拠点だったのである。

(12) 墓場平場

墓場平場は薬師堂平場南端から、南と南西とに分れた両支尾根に挟まれた部分であり、南支尾根基部（長さ約40m）の西側山腹と南西支尾根基部である鐘楼のある狭長支尾根（長さ約50m）の南から東南に面する部分の山腹を切岸状に切りおとし（比高最高15m）両支尾根にそうて、南に口を開く弧状の長い平場を作ったもの（中央部最大幅35m、両端最小幅2m。両端の直線距離は約60m）でその西端は鐘楼平場の南端下につづく小支尾根につづき、その東端は旧表参道登り路のある南支尾根基部を横切る平場となる。

神武寺城南表からの攻撃は薬師堂のある部分に向って行なわれるから、登り路のある南支尾根は攻撃に対して最も嚴重な抵抗部としての遺構を示し、登り路の終点は墓場平場前面切岸下を60m以上にわたって通過せねばならぬように作られ、この路の到達点は鐘楼平場から南にのびる小支尾根（長さ40m）に直角にたどりつかねばならぬから、墓場南縁下切岸通過中に大損害をうけねばならない。小支尾根基部の西には東西に長い大平場（鐘楼南西下平場）があつて防禦側の防禦拠点とな

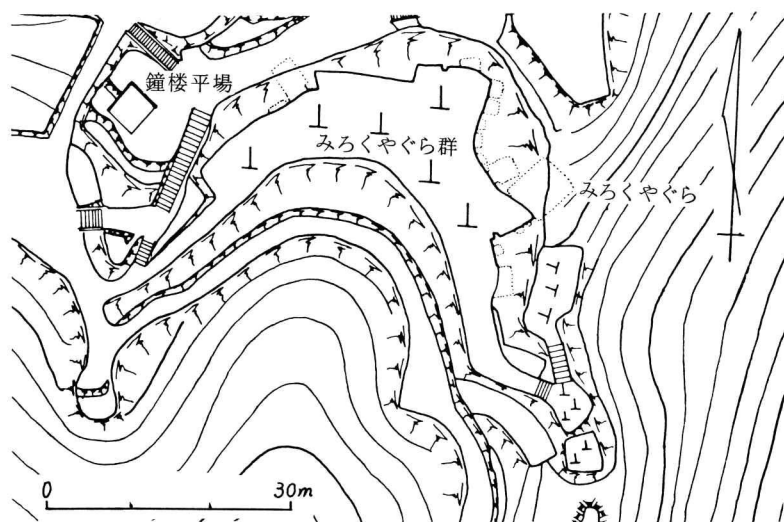


図11 墓場平場

法勝寺のある尾根先とダイラクボのある尾根先との間を谷の入口とする南向の谷が表参道のある谷である(沼間2丁目)。谷入口から北行50m、北西に折れて250mで、登り口のある支尾根先に達する。

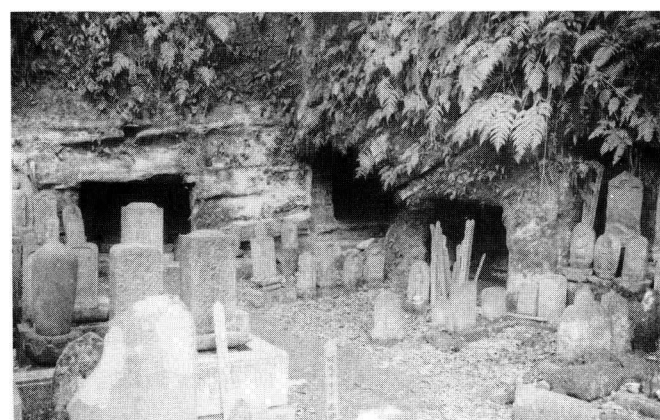


図12 墓場平場とみろくやぐら群

るから、墓場平場からこの小支尾根にわたる部分が遺構上からみて、当然激戦場とならねばならぬところである。

(13) 表参道支尾根

薬師堂平場の南端から真直に南にのびる支尾根。その基部は墓場平場の東上にあり、墓場平場の東上を真直に200m南にのびて終る。その先端部に特異形態の登り口がある。

「げないぼう」とはこのあたりの呼び名だともいう。

支尾根先の周は高いところからすそ切されており(裾標高29m)、登り口の路は尾根先の左側面を右まわりに登っている。先端部を左から右にめぐってのぼった路は20mほどのところで尾根を切り割って右山腹に出る。左にくの字形に折れ(第1曲部)、路は尾根頂を切り割った急坂としてのぼる。30mほどで斜左に折れ(第2曲部)、以後は尾根を右上にみて、尾根の左山腹5~6m下を通る路となる。右上に急傾斜山腹、左下に急傾斜山腹のある崖路である。路の傾斜はかなり急である。50mほど登るとゆるく右折(第3曲部)し、30mほど登ると、きわめてゆるく右折(第4曲部)し、ゆるい左曲部を描いてのぼること50mほどで、左にゆるく折れる(第5曲部)。この部分右前

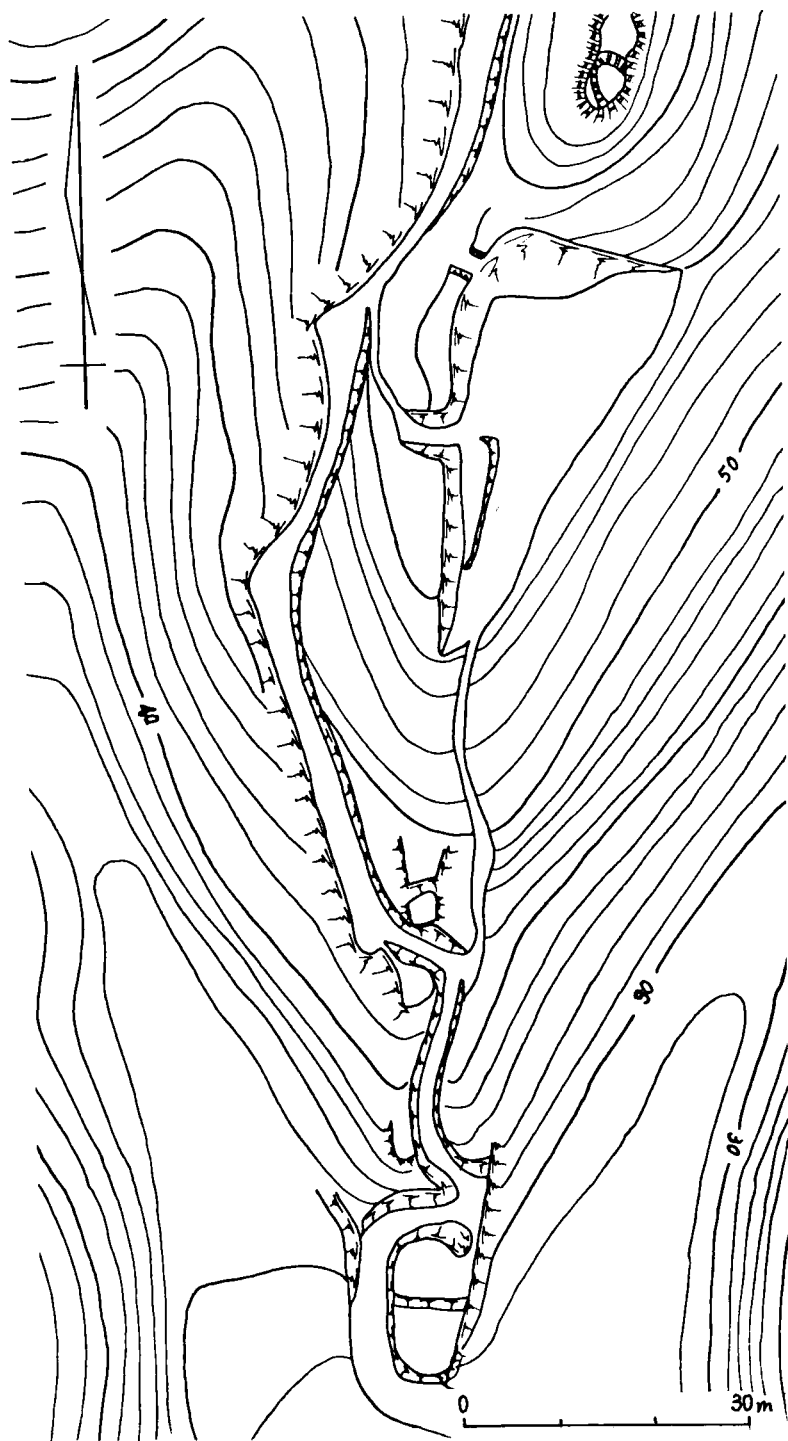


図13 表参道支尾根

方上が墓場平場の南東端になる。次後路は墓場平場の南縁（谷側縁）にそってのぼることになるのである。約30m進むと路は大きく左に弧状にカーブする（第6曲部）。40mほどで墓場平場の西南端下で、鐘楼平場の南端が南に突出した部分につき当る。鐘楼平場南西下平場の南東端である。（標高74m。登り口との比高45m。のぼり路がかなり急なことがわかう。）

第1曲部

尾根先を左から右に通る割って右山腹に出た路は尾根先端を島状に残し、切り割った路は尾根先とその上の尾根との間を切り、右山腹に顔を出し、左折して尾根頂を切り割った路になる。尾根先の複雑なS字形路はこの部分に防御の重点があることである。

のぼりはじめの尾根先切り割り部で、右側の切り残り尾根先の頂は路より2m高い平場となっており、第1曲部から右まわりにのぼれる。平場は隅丸方形に近い楕円形。南北4m、東西3.5m。西寄り部が50cmほど高い

土塁状となり、南西端が約50cm低い（底辺約3 m、高さ1.5mほどの不等辺三角形）小平場。

尾根先を切り割った登り路の左は約5 m高切岸となり、第1曲部で左折し、尾根頂をたてに切り割った路との間に頂を平場にした狭い部分が残る。この平場は幅1 m、路にそって長さ3 mほど。南端部分に約80cm低い1 m角の平場が付随する。これら平場先端の低い部分は逆茂木を設置したところであろう。西側の山腹は急傾斜（谷底との比高7～8 m）である。

第1曲部を左折した切り割り路は、左右が各高さ2 m余の切岸となる。切岸上の山腹は急傾斜。尾根先端切り残し平場との間およびこの平場の東側切り割り路は当然逆茂木で塞ぐ。

第2曲部

尾根頂を切り割った登り路は、第2曲部で右側山腹に出る。ここで左折し尾根を横切って左山腹に出る。尾根を横切った部分は切通し路となる。この部左右切岸高2 m。左上平場南北3 m、南端幅東西2 m、北端幅1 mの狭長平場だが北端は登り路と同じ高さになり、この部分が3 m平方くらいの平場となる。これら平場の左側は急山腹である。右切岸上方にはもと幅2.5 m、長さ2.5 m、先幅2 mの平場があり、その上にもう一つの平場が重なる。この切通し部も逆茂木で塞ぎ、左右の平場で防戦する。

第3曲部

第3曲部までは急傾斜山腹中段の片岸路である。第3曲部は路が広がって3 m平



図14 第1曲部

方くらいの平場になっているが、後世路を拡張したとき広がったものらしく、特に防衛上の意味はないらしい。第3曲部から第4曲部までは同じく急山腹の片岸路である。

第4曲部

同じく急山腹の片岸路であるがこの部分が5 m平方くらいの平場になっている。後世路拡張時にこの部分が平場状になったかともみえるが、この部分の右方尾根に作られた大平場から、この部に山腹を斜に通ずる路があるから、第1・第2曲部防衛隊を収容するための必要平場であるとの解釈も可能である。

右上方尾根上の平場は尾根の東側を削平した三角形の長い平場で、東山腹に底辺（南北長45 m）をもち、北



図15 第2曲部（森谷定吉氏撮影）

西に頂点（高さ17m）をもつ。平場の北西部と尾根頂との比高7m。平場中ほどで尾根頂との比高3m。平場の北西端（幅2m、深さ1mの空堀状）と中程（幅4m、深さ2mの空堀状）に西山腹の登り路へ尾根を切通した通路がある。この通路は尾根を切割った空堀でもある。本平場の南端から尾根を通り第2曲部に通ずる細道があるが中世からの路でなく、近年ハイカーの通路として自然にできた路のようである。

第5曲部

同じく急山腹の片岸路であるが第3曲部から第4曲部を通り、第5曲部の半ばころまで約50m間の右上尾根には前述の大平場があり、ここに多勢の防禦軍が位置し、多量の岩塊を準備できるから、縦深の深い強力な防禦陣である。したがってこの部分の登り路は通過困難である。

第5曲部の右上（約10m）尾根はほぼ平らであるが、嶮阻な露岩頂が約30mにわたって連続し、尾根を通るにはこの露岩を登り降りせずに

は通行できない。防禦施設として人工的に表面の土を除去し、嶮阻な岩を露出したものと考えられる。北端の大岩とその北側にある墓場平場東南端平場との間は空堀状に堀り切られている（幅約3m、深さ1m余）。

第5曲部の前方山腹には、この左曲り部を見おろす形に横13m余、幅3m余の弧状平場（高さ2m余）があり、その西端下の路は平場の延長状に幅（東西）7～8m、長さ（南北）10mほどが広がっており、この上に墓場平場の東南端が弧状に重なり（高さ4m）、その東半部は一段高い平場となる。この高い平場は前記露岩尾根と空堀をへだてた平場部分の北に更に高さ2mの切崖をもって重なる平場である。

第六曲部

墓場平場の南縁曲線にそって約5m下の山腹を通るほぼ水平な70m余の路で、西端はのぼり路になって上の平場に達する。墓場平場の南縁は山腹路に対して絶壁状に切り落されているから、路から墓場平場への攻撃は不可能である。防禦側はこの墓場平場南縁下の長い路を逆茂木で埋め、平場には多くの岩塊を準備山積できるから防禦充分であろう。即ちこの表参道からの攻撃はきわめて困難なものと考えられる。

(14) 十州望南尾根

神の岳東端十州望南尾根は十州望大露岩（標高134m）南側絶壁状岩の下から南にのびる長い



図16 南支尾根山腹の登り道

やせ尾根である。尾根途中で南西に三本の支尾根を分岐しつつ南東に向を変え、尾根南東先端は上の谷入口（標高20m。沼間4丁目）に達する。全長約700m。十州望との比高114m。本尾根は十州望から南に215mにある85m高地において尾根は南東に折れるが、ここで南西に長さ190mの支尾根を分岐、更に南東150mにて74.5m高地に達し、ここで南西に240mの支尾根（法勝寺西支尾根）を分岐。165mにて66.2m高地に至り、更に60mのびて尾根上の瘤（標高65m位）に至る。この瘤にて南西に130mの支尾根を分岐。両支尾根の間に法勝寺の谷を抱く。瘤から更に南東へ175mのびて尾根先となる。瘤から南西にのびる支尾根と南東にのびる支尾根との間に民家のある小谷を抱く。以下前記南尾根における防衛遺構を見る。

法勝寺東方尾根

沼間4丁目上の谷入口の西側にせまる尾根先が十州望東端大岩下から南にのびる全長約700m尾根の南東端である。本尾根の基部西側には神武寺表登り口の古道がほとんど中世当時のまま残存する。本尾根は最も攻撃困難とみられるこの登り口古道のある尾根の東側尾根である。したがって、正面登り口古道を攻めあげれば、谷をへだてた東西尾根からの攻撃を仕掛けることは当然と考えるから、本尾根にも相当の防衛遺構が残存するはずと考えた。攻撃路としては低い方から攻めのぼるのが普通である。

南尾根最先端は上の谷入口西側尾根である。尾根先端は約10m上から切岸状に切り落されている。この状態が中世からのものであるかは不明。周辺山腹はかなり急傾斜である。先端からみ上げる崖上に平場が存在する。この尾根先の南面下には地主岡本富三男氏宅があり、山腹裾は約5m上から切りとられている。すそ切をすることが防衛遺構の一つであるが現状は岡本氏宅が存在してからの裾状況であろう。岡本氏宅背後から急山腹をS字状に上の平場に路があり、この路にそって三つの小平場があるが、これが当初からのものか後世のものかわからない。上の平場は尾根先を削平したもので、東西20m、南北15mほどの矩形。南辺も北辺も根もと山腹に5mほどのびている。平場の北側には幅2mほどが約1m低くなった部分が付随する。この平場の西端には北西尾根からの下り尾根がつづいている。尾根先にこのような平場の存在が中世からのものでなければ、岡本家で後世隠居所でも建てた位置でもあろうが、岡本家にはその伝承はないらしい。神武寺城防衛上からすれば、本尾根からの攻撃又は上の谷からの攻撃に対する防衛拠点があったとしてよからう。

平場の南西尾根頂は平場に近い30mくらいが幅5mほど緩傾斜であり、これにつづく南西尾根は幅2～3mと狭く、尾根傾斜は緩であるが南山腹北山腹とも急傾斜である。尾根先より110mのぼった部分に径5m、長さ8m、高さ0.8mの瘤状部（64.1高地）がある。この尾根の中程南側に3mほど低い位置に幅3m、長さ7mの小平場を付随し、またこの部分より上の瘤状部に至る中間部に尾根を横切って高さ1mの切岸がある。

この瘤から上は尾根がゆるいS字状をなし、約65m先で高さ約5mの瘤（標高約65m）に達する。尾根路下半は幅1.5mほどと狭く、上半は4mほどに広がる。この部分の北東および南山腹はかなり急傾斜である。S字路中程に東方にのびる小支尾根があり、その上半は緩傾斜であるが、下半山腹は急傾斜である。この小支尾根南東下には上の谷路から西に約30m入りこむ小谷（いなり社をまつ）がある。この小支尾根上半のやや緩傾斜部の上部と尾根路との間は、傾斜がやや急であり、こ

の部分は幅10m余あり、中途に二段の段差部がある。中段の緩傾斜尾根の北側には一段低くテラス状部分が北西向に斜に尾根路方面にあるが、この縁は切岸状になって急山腹につづいている。これら小尾根と尾根路北西にある高い瘤（標高65m位）から東にのびる小尾根との間の谷は、S字状尾根北半部の東側山腹にあたり、尾根路の東縁は切り落したように急傾斜で山腹につづく。山腹には数ヶ所に崩壊をくり返したような急傾斜部分がつづく。緩傾斜山腹を防衛するために中世にこのように切られたものか、後世の崩壊によるものかわからない。（現在この部分の山裾は駐車場になっている。）

前述のいなり社のある小谷は幅8m、奥行約30m。谷入口より5mほどで谷に直角に高さ2mの切岸、更に10mほど奥で高さ5mの切岸が残存し、切岸より奥は甚しい急傾斜である。谷内にこのような切岸を設けることは中世城郭防衛上の一手法で各所に同じ例（注7）がある。

瘤（65m高地）部分から南西に尾根が分岐する。全長約130m。その先は法勝寺谷入口の東側に達する。尾根上半部には特に人工を加えたと思われる遺構はないが、尾根上幅3～4mは通行可能であるが、その南東側および北西側山腹は何れも急傾斜である。この状態で約90m南西に下ると、尾根先が一段低く作られた削平平場（長さ15m、幅3m）となる。このあたりから尾根先となり、山腹傾斜は急になる。20mほど先に馬蹄形に削平された部分（3m×3m）がある。この削平部のすぐ下は法勝寺入口路になる。

65m高地の瘤から北に向って幅の広い上り尾根路が約60mつづき、66.2m高地（頂部径10mほど）となる。この幅広い尾根路は瘤の北側では幅2mから4mに広くなり、その先は幅7mから8mの長い平場形となる。その東側下に接して山腹なりに南北30m最大幅10mの弧状平場が付随し、平場の南端近い部分からその下（約6m低く）に重なる南北20m、最大幅5～6mの弧状平場が付随する。この平場縁は山腹より3m高い。下の平場の南端は瘤（65m高地）の北裾に達する。このような大平場の積重ねは東山腹からの攻撃に対する防衛遺構である。西側山腹は急傾斜である。

尾根は66.2m高地から北西に走り、約60m先に径15mほどの低い瘤がある。両瘤の間は鞍部となり、尾根路南半は幅3m～5m、長さ20m余の平場をなし、北半部は幅8m、長さ30mほどの傾斜平場である。南北両平場の間には約1mの段差が作られている。両平場の東北側および南西側山腹は急傾斜である。この瘤を過ぎると尾根路は一度ゆるい下りとなり、鞍部をすぎると上りになる。瘤の先の尾根路は削平されていない。幅4～5mから次第に狭くなり、50mほど先の鞍部付近でく字形に折れる。折れる部分で1.5mほど高くなるが、路の西側が土塁状に高くなる。これを過ぎると尾根路は幅2mほどから幅1mほどになり、急な登りになる。両側の山腹は急傾斜である。のぼりつめると径20mほどの大瘤（74.5m高地）である。

法勝寺西尾根

大瘤から南南西にのびる支尾根がある。法勝寺谷の西尾根である。全長約240m。尾根先は神武寺旧表参道のある谷の入口（沼間4丁目と2丁目の堺）に達している（尾根先裾標高20m）。尾根先は高さ4～5m辺からすそ切になっている。これが中世からのものか後世のものか不明。いなり社のある尾根先山腹から尾根にのぼることは急傾斜なのでかなり困難である。急山腹をのぼると尾根上は緩傾斜である。幅3mくらい。20mほどゆるやかな傾斜を進むと尾根上幅5mくらいの平らに

なる。40mほど進むとゆるい上り約10m。尾根幅6m。約20mほどで幅4mと狭くなる。尾根がく字形に北北東に折れる部分で西に短かい支尾根が張り出す。尾根上緩傾斜部の基部幅5m。西に15m張り出す。張出部は基部との間に高さ1mほどの段差が作られて低くなる。

北北東に折れ曲った部分から約20mの尾根上面は幅4mあるが東半が土塁状に高く、西半がゆるい傾斜になっている。その先は尾根幅2.5～3mとなり、次第にのぼりとなり、瘤に近づくとやや急になる。約60mで瘤（74.5m高地）に達する。本尾根の東西山腹は急傾斜である。

74.5m高地北西側はゆるやかに下ってその先は北西に一直線に150mのびる。74.5m高地の北西裾に接する部分から先は幅10mばかりの削平された尾根が60mばかりあり、山腹との堺は急に切岸状になる。（現在これらの部分には杉の植林がある。植林のため後世削平した部分であろうか。）この広い削平部分の北西端20mほどは幅8mくらいであり、次第にのぼりとなり、先の10mくらいの幅は次第に狭くなり、3mになる。尾根はゆるい傾斜で北上すること約40m。尾根を横切る空堀で尾根路が切られる。空堀幅3m深さ60cm。横長さ約15m。空堀先の尾根は幅3m～4m。約15mで小瘤（径5～6m）に達する（標高85m）。瘤から南南西に支尾根が分岐する。この支尾根は神武寺旧表参道のある尾根先の東側に小谷をへだてて北北東にある小尾根である。

旧表参道尾根の東側小尾根

本小尾根は85m高地から南南西に約190mのびる小尾根であり、先端がく字形に南南東に折れる。本小尾根先裾標高約30m。先端部裾まわり高さ10mほどは急傾斜であるが、その上は尾根先がかなり緩傾斜である。高さ約30mあたりから尾根が削平された様子がみられ、長さ約20mは幅5m～3mで平。その先10mばかりがやや急傾斜。急傾斜の上は幅10mほどとなり、長さ70mほどがきわめてゆるい傾斜（先の方は幅8m）の尾根となる。このあたりから尾根削平幅が5m～6mと狭くなり、傾斜も急になり約30mで瘤（85m高地）に達する。本尾根の東西山腹はきわめて急傾斜である。

南尾根の基部

85m高地の北尾根は約200mで神の岳東端岩山（標高133m余）十州望に達する。85m高地北側尾根路は幅2～3m。北北西へゆるく下り、また少しのぼり、35m進んだところで高さ1mほどの小瘤（径5m）に達する。尾根は方向を北に変えて一直線に十州望に進む。この小瘤あたりから尾根は露岩の連続となり、露岩をのり越えるか、そのわきのわずかな通過可能部分を岩につかまって進むところが多くなる。露岩と露岩の間にところどころ尾根を削平した部分があるが山腹は急傾斜である。小瘤の北20mほどのところから、尾根露岩の東側裾を切り落した石切あとが30～40mつづく。中世の石切あとか、後世のものかわからないが、石切によってこのあたりは山腹から尾根への登攀ができなくなっている。このあたりは東側の谷奥にあたっている。尾根に南北130mにわたってつづく露岩の高さは不同。2mから10mに及び、上幅も不同。多くは1mから3m。武具をまとい武器をたづさえてはこの尾根を通過することは困難であろう。

露岩尾根の北端は高さ2m、幅10mの大岩であり、この岩から北は急傾斜の上り山腹約40mで、高さ10m余の大露岩絶壁につきあたる。絶壁下部は高さ2m、奥行5mほどの段丘を2段重ねた雛壇状部分の上に高さ8m許の絶壁が立ち上っている絶壁上が十州望である。即ち雛壇状露岩が南に張り出した部分は十州望から法勝寺までのびる南尾根の基部であり、この部分の西および東は西側

および東側の谷の谷頭部分であり、神の岳頂上をめぐる露岩の絶壁状地形部分である。

(15) 上の谷奥

現在の上の谷（沼間4丁目）は広い路が入口から谷奥に通じ、それにそって住宅がならんでいるが、勿論古くはこの道はない。谷は細長い水田だったから畦路があっただけである。谷が水田になる以前は沢であったはず。小路もない沢に攻め入ることはできない。現在の状況では谷奥の民家にとだえたあたりから奥は、次第に高くなり、雑木や篠で覆われており、これをつき進めば谷は二つに分かれ、左谷を進めば谷はまた二つに分かれる。右の谷（左谷は左に折れるから、右谷を進むと大体真直に進んだことになる）は浅く、すぐ正面の谷頭部分で谷奥の急な山腹につき当る。中世以後谷が水田としてひらかれて後も谷奥状況は雑木や篠に深く覆われていたろうから、谷間からの攻撃はまづできなかったであろう。現在谷頭で急山腹をよじのぼると、上の谷の東側を抱く丘陵の基部にのぼることになるのである。この丘陵は上の谷入口の東側にその先端をそびえさす丘陵であり、丘陵の東側は県営住宅群のある谷（大日影谷）の入口になっている。この丘陵山腹は上の谷の西側を抱く丘陵（十州望南尾根）と同じく急傾斜である。丘陵尾根状況は未踏査であるが、其の基部は上の谷奥から谷頭をよじのぼった部分に相当するから、結論としてはこの丘陵からの攻撃はすこぶる困難ということになる。以下、上の谷谷頭から十州望岩山への地形を説明する。

上の谷谷頭から十州望への地形

上の谷最奥部民家から奥は狭谷であり、谷底は緩いのぼりになる。50mほど進むと谷は二つに分かれる。右のV字谷（谷底は急傾斜）を進むと150mで谷頭の尾根にのぼる。この地点は十州望東端中腹から東南にのびた岩鼻先端が約30mの土橋状部分を通じて、その南東にのびる丘陵（上の谷と大日影谷との間にある丘陵）の北西端に通ずる部分で、上の谷奥部と大日影谷奥部との間に位置する。たどりついた地点は土橋状尾根の南東端であり、尾根幅3m。上の谷側も大日影谷側も山腹は急傾斜である。戦時態勢になった場合、十州望に近い部分を掘り切れば、この方面からの攻撃はきわめて困難である。

即ち、北西方向に走る幅3m長さ30m土橋状尾根の先はその北西上方1.5mにある北西西—南南東方向の幅約5m、長さ30mの平場が防衛拠点となり、急山腹をよじのぼって攻撃する以外に攻撃できない。十州望北東山腹から鷹取山路があるが、この路から分かれて十州望北東側山腹を通过这个平場に達する路（ハイキング路）があるが、岩山の急崖中腹路であり、途中岩場に材木を渡して通路とした7～8mの栈道もあり、全長約80m。戦時状態においては当然この道は通過不可能になる。十州望南東端からの旧道とみられるものがあるが露岩の急崖路である。

即ち上の谷奥からの攻撃路があったとしても以上の如く通過不能であろう。上の谷左奥の谷頭は十州望南尾根基部の東側であり、十州望東端急崖部であるから、これも攻撃困難である。上の谷東側丘陵基部が既述上の谷奥部の土橋状尾根と同じものであるから、東側丘陵からの攻撃もきわめて困難なものである。

(16) 鷹取山路尾根

神の岳東端十州望から北に下る尾根は75m辺で二つに分かれ、北西と北東とに分岐する。北東に分岐する尾根が鷹取山に通ずるものである（直線距離約600m）。この尾根路が鷹取山ハイキング路

で、現在の路はハイキング路として作られたものであるから、これを神武寺城防衛という観点からそのまま見ることはできないが防衛できそうな部分を一応見てみる。

鷹取山（標高139.5m）は凝灰岩の岩山である。各所に石切あとがあって中世の状況は全く不明である。真西に向う尾根を約50m下ったところ（約10m低くなる）で一旦岩山がとぎれ、前面の岩山との間に土橋状部分（第一土橋）がある。多分これはハイキング路として作られたものであろう。中世には多分この部分は岩山と岩山の間の深い鞍部であったと思われる。

ここから西約70mに高圧線鉄塔（第一鉄塔）がある岩山（標高133m）がある。このあたり一帯は岩山（凝灰岩）つづきの尾根であり、大岩の周は高い絶壁状である。俗に「親不知」という。中世、路もないこの岩山尾根を通過することはきわめて困難だったはず。第1鉄塔の西70mに第2鉄塔のある岩山（標高127m）があり、第2鉄塔の35mに第3鉄塔がある。鉄塔周辺は岩山である（凝灰岩・泥岩の露頭）。第3鉄塔の先75mに第4鉄塔がある。ハイキング路は鉄塔のある尾根頂を通っており、第3鉄塔と第4鉄塔との間に2ヶ所の土橋状がある。第4鉄塔の先にもう一つの土橋状がある。これら土橋は何れも岩山尾根の頂を結んで作られている。中世にはこの土橋はなかったはずだから、きびしい岩山尾根を登ったり下ったりしなくては神の岳に到達できぬ大難路だったはずであり、尾根南側・北側の山腹は裾まで40mも50mもある急山腹で登攀きわめて困難であるから、この部分に神の岳への裏通路があったとしても、攻撃路としては使うことはできなかったと考えなくてはならない。

(17) 北尾根

神の岳東端十州望から北にのびる中腹尾根が北面に分岐するものを北尾根と呼ぼう。北西へ約1000mのび、逗子中学校裏山に通ずる尾根である。これら尾根山腹は何れも急傾斜であり、尾根はやせ尾根であるから小人数の通過はできても大部隊の攻撃路ではない。

現在尾根としては特に通過困難な部分はないが、左右の谷が谷頭を接し、土橋状を呈する部分が各所にあるから、戦時態勢においてはこの部分を掘り切って防衛することは考えていたであろう。鷹取山ハイキング路との分岐点から75m北西にのびる尾根地点で掘切れば、分岐点までの間の尾根が十州望北側急山腹を背にした防衛拠点にはなるであろう。北尾根には防衛遺構と思われるものはない。

考 察

信仰の山と山城

神武寺は古くは神の岳（神山）を中心とする信仰の山だったことは「神の岳」の名からも考えられるし、「女人禁制」碑が残っていることから、その信仰が後世までつづいたこともわかる。沼間小学校（沼間一丁目）南方丘陵からみると、神の岳とこんびら山が二子山形に他の尾根の上に高くそびえていることからもうなづける。その丘陵の北裾にある沼間台に弥生後期から古墳期を経て奈良期にいたる竪穴住居群跡があるが、北端の古墳時代（和泉期）竪穴あとから滑石製剣形と勾玉が出土した（注8）。それらの滑石製模造の玉を懸けたれた櫛を立てて前面にみえる神山を拝したもの

だろう。祖霊がこもる山としての神の岳(神山)の信仰が、後に古代の神山信仰をうけつぐ天台系山伏にうけつがれたことは、薬師堂と山王社が併立して存在することが物語っている。神仏垂迹説による仏教的信仰が薬師信仰の神武寺として今に伝わったものであろう。こんぴら山は遠く海上からその姿がのぞまれるところから後世こんぴら信仰の山ともなって、神武寺山の薬師信仰に加わったものであろう。しかしこうした信仰の山と嚴重な城郭あとを残す山城あとは無関係だったと考える。山城については文献にも、伝承にも全くないし、誰も考えなかった。

神武寺城の存在価値

しかし現実に城郭としての嚴重な防衛遺構が神の岳とこんぴら山を中心に残存することは既に説明したところである。

神武寺山は地形的にそのままで既に要害地であるが、それに多くの人工的防衛構造を加えた立派な城郭としては神武寺が自衛上の必要から城郭としたか、近隣の豪族が万一の場合の城郭として構築したかの何れかであろう。しからは神武寺が有力な城郭として存在価値があった理由は何だったのだろうか。

逗子低地の大部分は古くから入海だったから、古代通路は周辺の山裾を通らねばならなかった。古東海道は鎌倉材木座海岸から飯島の扇山を経て、小坪のうばがやとに下り、披露山を経て、現在の逗子駅辺の山裾から、池子・沼間・桜山と入海周辺を鳴鶴崎・あぶずり崎・森戸・前田・木古庭……走水と三浦半島を横断していた。

神武寺城が自然地形の要害に加えて人工的防衛構造が嚴重であること、その防衛構造が神武寺薬師堂平場・客殿平場をとりまいて嚴重であることは如何にも神武寺が自衛上の築城であるかとも考えられるが、豪族が神武寺を城として造成したとしても、当然主要建物のある部分を中心とされねばならなかったであろう。

豪族が誰かわからないとしても、神武寺の位置的条件からみると、当時逗子入海は退いてそのあとかが広い湿地・沼地になっていたと思われ、古代からの通路はその湿地の周辺を古代からのまま通っていたと考えられる。その湿地の奥が今の東逗子駅あたりだったと考えられるから、神武寺城は湿地最奥部に位置し、湿地周辺の路を通過するには神武寺城の存在を無視できぬはずである。

神武寺城の時期と造作者

鎌倉七切通はほとんど同じころ造成されたが、その大部分は後世の変形によって造成当時の形を残していない。しかし名越切通や大仏切通は外部から切通へかかる山裾構造が全く同じであり、これは神武寺旧表参道登り口の構造とも全く同じである。名越切通は鎌倉と逗子との界にある尾根を切通したものであるが、尾根を切り通した部分から北方にむけて尾根の逗子側面を垂直に切り落して、長い長い切岸を800mも連続させた構造(南方は宅地造成で破壊されてしまった)を残している。このような長い切岸によって敵の攻撃を防ぐやり方は、神武寺城において、表参道上部防備の墓場平場南縁から、こんぴら山中腹を正面のげないぼう谷奥から海宝院谷奥にかけて延々500mにわたる大平場と、その背面につづく山腹の長い長い切岸配備の構造とが全く同じである類似点を示

す。このような特異の防衛構造は未だ他の山城においては知られていない。防衛構造の類似は造成時期の近似を意味するから、神武寺城造成が鎌倉七切通と近似の時期に造成されたと考えなくてはならない。七切通が作られた仁治2年(1241)直後頃、北条氏が名越切通を最も嚴重に造成し、特に逗子側を敵攻撃の正面と考えて、丘陵上に延々800mにわたる大切岸を造成したのも、強敵三浦氏の攻撃に対する防衛であったことからすれば、名越城の前面大湿地奥の最有力地点である神武寺山を城郭として造成したことは、三浦軍が名越城を攻撃する以前に神武寺城で防ごうとした計画ではなかっただろうか。しかりとすれば神武寺城は名越城の出城であり、造成者は北条氏であると考えることができる。神武寺旧表参道登り口の類似や、山腹をめぐる延々500mにわたる平場と切岸を持つ構造の類似もそれを証するものではないだろうか。

結　　び

古来信仰の山であった神武寺に中世山城遺構が存在することは誰も考えなかったことである。文献にもないし、伝承にもない城郭である。その城郭遺構は薬師堂平場と客殿平場を中心に存在し、神の岳とこんびら山を中心とする自然要害に人工を充分加えたものであった。

神武寺表参道登り口の構造が、逗子側から名越切通への登り口構造にきわめて似ていることから、中世城郭の存在を考えて調査したが、表参道上部防衛のための墓場平場南縁・げないほう谷奥から海宝院谷奥へとつづく、500mにわたるこんびら山中腹の長い長い平場と、その背後につづく長い切岸の構想が、名越切通北側尾根の逗子側を垂直に切り落した800mにわたる大切岸と、きわめて似た構想であることから、神武寺城郭化の時期と名越切通城郭化の時期とが近接するであろうこと、同じ構想の城郭が同じ命令者によって作られたであろうことが推察される。名越切通の城郭化は三浦氏の反撃をおそれた北条氏によって計画された。

古代には逗子低地には入海が池子・沼間辺まで入っていた。古東海道はその周をめぐる鳴鶴崎・あぶずり崎から葉山へ通じ、木古庭から走水へと三浦半島を横断した。逗子入江はその後汀線が後退し、名越切通が城郭化されたころには大湿地になっていたから、古代からの路はそのまま中世の路でもあった。湿地奥は神武寺山の西裾に接していたから、神武寺山は交通上の重要地に位置した。神武寺城は名越切通城の出城として造られたと考えたい。

遺構のある丘陵については必要以上に詳細な記述をしたが、将来神武寺城の存在について検討されるときに備えたものである。全体としては原稿を書き出してみても各尾根の踏査がまだ不充分だったと思うことが度々あったが、自然の山にかえってしまった山城を、きめられた期間内に自然の山からみつけだすことは、きわめてむづかしいことをつくづく感じた。それに調査が一年の中、落葉期のきわめて短かい期間しかできないこともあって未調査部分もあちこちにあったことが、原稿執筆中にわかったが、もうどうにもならなかった。将来検討することがあったら補ってほしい。山城調査は骨の折れる仕事であるが、その期間中健康が保てた。しかし原稿執筆期になると運動不足がつづいて健康をそこねるのが常である。神武寺城執筆中も入院せねばならぬことになって、予定が一ヶ月もおくれた。でき上がった原稿も充分検討する時間がなかったから自分としては満足のゆく原

稿でないことを残念に思う。

註

1. 三浦郡は天保五年刊。「小坪村……住吉古城蹟「永正七年長尾六郎為景蜂起の時、北条新九郎入道早雲仮に当所の古城を取り立て楯籠る。」と記し、又、「されど早雲も須叟にして当城をすてしかば、後三浦介義同が抱城となりしにや。同九年には義同岡崎の居城を北条早雲に攻落され、姑く当城に遁れしが、又此城をも没落して三浦城に奔りしこと、小田原記に見ゆ」とあるのが唯一の記録である。
2. 「逗子市 住吉城址」昭和55年3月31日刊 逗子市教育委員会
3. 切通の南側一帯。亀ヶ岡団地・南ヶ岡団地・西武光明寺団地など。
4. 「逗子市名越遺跡——中世の切通・城郭・葬送遺跡——」名越切通遺跡調査団 昭和54年3月31日刊 逗子市教育委員会
5. 「沼間堀の内について」逗子市文化財調査報告書第2集(沼間) 昭和46年刊 逗子市教育委員会
6. 「逗子地域の地質」見上敬三・江藤哲人調査 昭和55年3月刊 逗子市文化財調査報告書第9集 逗子市教育委員会
7. 名越切通城と同時期に北条氏との決戦準備をしたと考えられる三浦氏の衣笠城跡(横須賀市衣笠町)をめぐる山腹の小谷はすべて同じ遺構が存在する。
8. 赤星直忠「沼間台弥生土師遺跡」逗子市文化財調査報告書第5集 昭和49年3月刊 逗子市教育委員会

現地の調査・測量については、神武寺をはじめとして、多くの地元の方々に御協力をいただいた末筆ではあるがここに御礼申し上げます。

今回の調査・測量と報告書作成は、下記の人々と機関の協力と援助によってなされた共同作業の成果である。

本報告書は主として赤星直忠が執筆し、「調査の経過」を山田亨史が執筆した。写真についても、主として赤星直忠が撮影したが、内海孝平・森谷定吉両氏にも提供していただいた。なお、編集は塚田明治がおこなった。

調査関係者(順不同)

逗子市教育委員会

教育長 高木栄一、教育次長 本間幸宏、社会教育課長 堀内智也、社会教育係長 窪田 浩、社会教育課職員 平 和夫、花井和男、小沢 充、若菜克己、岩崎正文、山田亨史、石井清司、宮川富士男、宮里正憲

調 査 団

団長 赤星直忠、内田武雄、塚田明治、軽部一一、海原泰江、屋内秀明、岡田義春、金島毅一、
小倉 真、臼井 敦、清水喜美男、土屋雅子、市原喜美男、赤池 円、逗子開成高校地歴部

(付1) 資料にみる神武寺の歴史

内 田 武 雄

古 代 の 神 武 寺

聖武の帝^{みかど}のご発願^{はつかん}によって、奈良の都に東大寺大仏が完成したのは天平勝宝元年七月のことである。新しい仏教興隆の波は全国津々浦々に広がって、東国のはずれ三浦半島にも及んできた。半島の中心部に当る公郷村に宗元寺が建立された。神武寺の創建についても、縁起の文章が伝えるようにそのまま奈良時代であるということは、俄には決めかねるが、かなり古い時代にまで遡ってその創建を考えことができそうである。

文禄三年(1594)の奥書を持つ「神武寺縁起」には、「相州三浦郡医王山神武寺は、往昔人王四拾五代聖武皇帝の御本願、行基菩薩の開山、文徳天皇の御祈願所、慈覚大師の再興也」という書き出しで、その成り立ちを述べている。神亀元年(724)甲子正月十二日の夜、聖武の帝が霊夢をご覧になって、行基菩薩が勅命を受



図17 神武寺縁起(部分)

け東国へ下向した。そして今寺のある山中に神武寺を創建したと述べている。行基菩薩は自ら刀を執って、「十一面観音・釈迦如来・薬師如来」の三尊像を彫り、寺内に祀ったという。このまま信ずることは証拠となる史料もないことで、到底無理と思われる。しかし先きにも触れたように、かなり古い時代にまで神武寺の創建を遡らせて考えることはできる。その理由を次に述べよう。

沼間の台遺跡から桜山の持田遺跡にかけては、弥生中期以降奈良平安に至るまでの遺物の出土品や住居址などが数多く発見されている。また市内には沼間を含めて奈良時代の横穴古墳が数多く残されている。最近には沼間のグリーン・ヒル住宅地続きの丘の上から、縄文時代や古墳時代の出土品がみつまっている。こう見てくると、古代に於ける沼間地区には、神武寺の創建を支えるに足りる十分に進んだ文化が根付いていたように思われる。

神武寺の所在地を含めてその周辺は、奈良時代には相模国鎌倉郡に属し、沼浜郷と称していたようである。天平勝宝元年(749)頃のものと思われる正倉院御物古裂の銘に、「相模国鎌倉郡沼浜郷戸主大伴部広麻呂調布壱端(下署)」と記されているものがある。

調布とは調として貢納した布で、大伴部広麻呂が納めた沼浜郷からの調布は、八世紀頃の沼浜郷の繁栄を物語っているように思われる。沼浜というのは今の沼間の古名であろうと考えられている。

次に神武寺そのものに触れてみよう。薬師堂の建て物は文化財報告書にあるように、文禄三年(1594)頃に建立されたとし、薬師像も近世初期十六世紀末から十七世紀にかけての頃に造立されたとしるので、到底神武寺の古代に触れて言挙げする史料は持ち合わせない。しかし堂の本尊仏の背後に、古仏像のものらしい木材の部分保存されている。先年の文化財調査の折にこれについては既に注目されていたが、最近これらが平安期のものかも知れないという疑いが持たれてきた。

以上のようなことから、神武寺の草創時期を古代にまで引き寄せて考えることが出来そうになってきた。

縁起には山麓の大沼の大蛇伝説が述べられている。毒気を吐く大蛇に住民が苦しめられていたところ、折しも行基菩薩が巡錫して来られ、大蛇を折伏して住民を助けて下さったという伝説

である。神武寺の近くに日蓮宗寺院の法勝寺がある。ここにも「正覚寺古縁起」があって、同じような大蛇の物語が伝えられている。文化財報告書第一集は、これらの大蛇伝説について、仏教が定着する以前に沼間地域に一種の龍神信仰が流布されており、同時に鷹取山を神と祀る山岳信仰があったのではないかと推理している。これらの原始的信仰に熊野修験や天台密教が入り雑って、山岳寺院の形をとるに至ったのではないかというのである。たいへんに興味をそそられる考え方である。

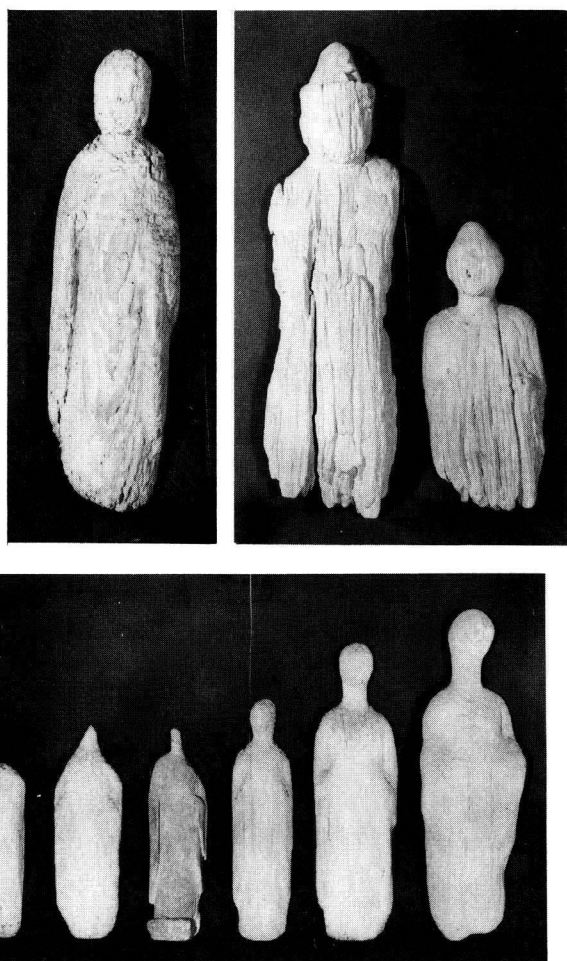


図18 神武寺薬師堂の破損仏(内海孝平氏撮影)

古代神武寺の住職

第一世	行基	神基元年(724)正月開山～天平勝宝(749)元年二月二十三日示寂(八十二歳)
第二世	行遍	天平六年(734)四月四日示寂
第三世	寂照	天平勝宝四年(752)二月二十三日示寂
第四世	光然	天平宝字元年(757)十一月三日示寂

第五世 淨 明 神護景雲二年(768)十一月一日示寂
 第六世 安 道 宝龜元年(770)三月二十三日示寂
 第七世 還 淨 天応元年(781)七月二十二日示寂
 第八世 完 具 延暦二十一年(802)十一月三日示寂
 第九世 恵 道 大同二年(807)八月一日示寂
 第十世 慈 覺 中興開山、天安元年(857)四月初申の日、日吉山王権現を安置、不怠護摩を修行、貞観6年(864)一月十四日示寂
 第十一世 広 弁 貞観八年(866)四月二十三日示寂
 第十二世 円 衡 仁和二年(886)七月二十一日示寂
 第十三世 長 巖 元慶三年(879)三月十二日示寂
 第十四世 智 英 延喜十年(910)六月八日示寂
 第十五世 智 田 延喜五年(905)十一月十一日示寂
 第十六世 義 雲 延喜二十一年(921)一月二十九日示寂
 第十七世 明 空 応和三年(963)九月十三日示寂
 第十八世 栄寂慈宣 天曆四年(950)二月二十六日示寂
 第十九世 淨 巖 貞元元年(976)三月十八日示寂
 第二十世 空 存 正暦三年(992)二月四日示寂
 第二十一世 証 空 万寿二年(1025)九月二十八日示寂
 第二十二世 淨 運 長元二年(1029)二月二十二日示寂
 第二十三世 忍 証 寛仁二年(1018)九月二十四日示寂
 第二十四世 明 忍 治安三年(1023)六月七日示寂
 第二十五世 義 円 長暦二年(1038)五月二十五日示寂
 第二十六世 慧 舩 延久四年(1072)四月十四日示寂
 第二十七世 慧 運 康平元年(1058)八月四日示寂
 第二十八世 慈 観 寛治六年(1092)二月十九日示寂
 第二十九世 良 然 延久元年(1069)五月二十九日示寂
 第三十世 了 源 天永元年(1110)七月六日示寂
 第三十一世 堯 叡 久安四年(1148)六月十九日示寂
 第三十二世 覺 忍 康治二年(1143)十月十六日示寂
 第三十三世 空 如 保元三年(1158)一月二十一日示寂
 第三十四世 義 忍 養和二年(1182)八月十四日示寂
 第三十五世 学 巖 寿永三年(1184)一月五日示寂

中世の神武寺

今まで述べた古代神武寺の寺史は、ほとんど確実な史料というものを欠いていたが、中世の寺史

については、わずかではあるが正確な史料らしいものに支えられて記述することができる。

吾妻鏡の建久三年(1192)八月九日の条に次の記事がある。

「九日、己酉、天晴風静なり、早旦以後、御台所御産氣、(註・実朝懷妊)御加持は宮法眼、驗者は義慶坊、大学房なり。鶴岡・相模国の神社仏寺に神馬を奉り、誦經を修せらる。所謂(後畧)」として、次に神社仏寺の名前を列挙しているが、その中に八幡宮や五大堂、大山寺、宗元寺と肩をならべて「寺務寺」という寺名が見える。若しこれが「神武寺」であるとすれば、鎌倉初期に於て既に相模国でも主だった二十七社寺の中に数えられる寺院であった証拠となる。

同じく吾妻鏡の承元三年(1209)五月十五日の条には、將軍実朝が…

「十五日、丁未、神かみ嵩並いほびに岩殿いわどの觀音堂に御参」とある。前の年、承元二年正月十日、將軍実朝は、痲瘡を病み、「頗る心神を悩ましめ御ふ。之に依つて近国の御家人等群参す。」となっている。承元三年の神武寺と岩殿觀音の参拝は、どうやら病氣快復のお礼詣りであつたらしく思われる。ともかくも將軍が病氣全快の礼詣りをする程に格式の高い寺院であつたことがわかる。

寺縁起では、中世の時代を次のように述べている。少し長くなるが引用してみよう。「寿永二年癸卯、將軍頼朝公御参詣ありて、平家追討の其のために御建立、殊更拾二寺院を當みて、常法華三昧の道場と成して、高尾の文覚聖人を住職と定めらる。行基より三十八代に當り、法華読誦の庭には、七宝の花咲き、五逆の衆輩積善の士相友に所求の願望を満たしけり。翌年元暦の始め正月九日、参拾余町南、田越の浦浜に、山王権現の御社を建て、御旅殿として始めて神輿を渡し、祭礼の式、嚴重なり。三浦の一門並氏人等執行す。建保六年戊寅同じく將軍実朝公は、右大臣に成り給ふ。御ご嘉かびのため修理を加へ、寺務山林以下、右大臣家の例に可任の旨、御教書を成らせらる。光嚴院の御宇、正慶元年壬申、伽藍小破に及ぶ。故に御修覆御座。崇光院の御宇、觀応元年庚寅御建立御座。鎌倉の宝戒寺の第二代慈源和尚を住呂と成す。円觀聖人の御弟子円頓戒の祖師、俗性は高氏公の第三男なり。凡そ当山は九品安養の峯平らかに、妙覺五智の靈窟、四生済度の衢として、真如の相明かなり。されば士農工商にかきらず、祈念の功、露空しからず。諸願現當の思ひ成就を得たり。往者久寿の頃にや、三浦荒次郎義澄も、当山を信じて年久し。故に其名を天下に知られて後、成仏得脱せりとかや、古墳今寺前にあり。和田小太郎義盛、朝比奈三郎義秀等、皆信心の力にて冥護あり。しかも功名富貴す。伏見院の御宇、正応三年庚寅の春、大唐高麗の舞師、本朝神樂博士從三位中原の光氏と云ふ仁、世を遁れて後、日本国を順しん礼れいし、猶東雲の方に趣きしか、一夏の間、当山に籠居して、身の罪障を祈りけるに、薬師如来告げて曰く、弥勒の出世其の暁を待つべき地なりと、光氏感涙を流して、自ら五尺計いさかの石の弥勒仏を刻し、同長月五日、行年七拾三歳にして入定す。花降り雲来りて、遺窟より光明を放つと云へり。其の靈仏前成岩窟の内にあり。かかる有難き貴院、星霜めでたくふりゆき、去る元弘・建武の世の乱れにもつつがなき所に、如何成天の災い遁がるる事能はざるにや、後柏原院の御宇、永正四年丁卯十一月始の七に、火出来て神社仏閣、凡て三百余ヶ所、一時の灰燼と成り、靈宝記録梵器の類皆悉く焼亡し、漸く西聖作の本尊のみ、宿老是を守護し、或は又如来神力を現わして、煙中を踊り出で給ふ共云ふ。厥それより當時大いに廢れて、なきがごとくなるに、正親町院の御宇、北条氏直郷さばかりの伽藍零落を悲しみ給ひ、八州に触れ仰せて、三所の御堂を建立して、百余石の神領を寄せらる。天正八年庚辰三月二日、本宮の女人禁制可任恒

例の旨沙汰せられ、猶以て諸舎の絶えたるを建立あるべきのよし、促さるるの処に、同拾八年庚寅七月七日、小田原落城の砌より、自然に又衰へ、古の精舎の跡のみ残り、神領も山林も^{わす}に残りたり。」

ずいぶん長い引用になったが、鎌倉幕府や小田原北条氏の厚い信仰を受けた神武寺が、小田原落城と共に衰え、落魄の時期を迎えたという中世の寺史の推移がよくわかる。

縁起の中にもあった鶴岡八幡宮の舞樂師中原光氏の墳墓窟や、その墓であるという弥勒石仏が現在も残っていることは、霧に包まれた中世神武寺の歴史にひとすじの光がさしこむように思われる。寺内にはなお「親王やぐら」

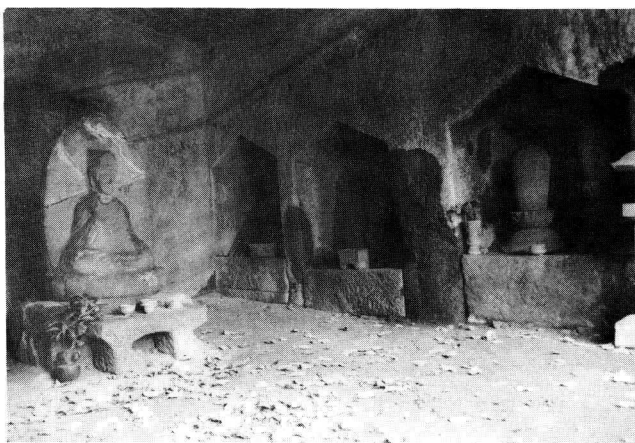


図19 みろくやぐら（内海孝平氏撮影）



図20 親王やぐら群

と称する墳墓窟があり、鎌倉八代將軍久明親王の廟であると伝えている。此所は立ち入ると崇りがあるとして、人々の近づくことを禁じている。鎌倉末期のものらしい五輪塔が祀られているが、風化が甚だしく、塔に刻まれた文字は読むことができない。

中世神武寺の住職

第三十六世 重 慶 建仁二年(1202)十月一日示寂

第三十七世 義勇（重勇か） 重慶弟の由、示寂年不詳

第三十八世 文覚義湛 正治二年(1200)七月十三日示寂

（右寿永二年(1183)癸卯將軍頼朝郷之命ニ依り、当寺住職之由伝へり。併シ暫時ノ事ニ而、義湛ト記ス。高雄寺ニテノ弟子ナラン哉不詳。）

第三十九世 道 栄 建長七年(1255)八月九日示寂

第四十 世 観 空 正安三年(1301)二月三日示寂

（建長寺開山蘭溪之弟子ノ由、之ヲ記ス）

第四十一世 寂 證 文和二年(1353)十二月二日示寂

第四十二世 慧 証 観応元年(1350)三月十七日示寂

第四十三世 普宣国師慈眼(瀧) 永和二年(1376)九月十五日示寂

(尊氏公第三男之由也、右鎌倉宝戒寺開祖円観上人之弟子ニテ、彼ノ寺第二世兼当寺住職ナランカ、不詳)

第四十四世 恵 明 康安元年(1361)正月二十七日示寂

第四十五世 慈 航 至徳元年(1384)八月二十八日示寂

第四十六世 慈 林 明德三年(1392)二月十二日示寂

第四十七世 延月智道 応永十八年(1411)四月二十日示寂

(江州三井寺ニ至リ某成官僧正トカ申ス、不詳。)

第四十八世 道 純 応仁元年(1467)十一月三十日示寂

第四十九世 長誉堯純 永正四年(1507)三月二十六日示寂

第五十世 恵 然 天文二年(1533)六月一日示寂

第五十一世 長海(仮名周海) 天文十年(1541)正月十三日示寂

第五十二世 宗 観 元亀二年(1571)十一月十日示寂(法眼)

第五十三世 尊乗義順 永禄十二年(1569)二月二日示寂

第五十四世 義 道 天正十八年(1590)九月三日示寂

第五十五世 弁 応 文禄三年(1594)十月二十六日示寂

第五十六世 賢 海 文禄四年(1595)七月二十五日示寂

第五十七世 賢 栄 元和二年(1616)四月二十七日示寂

(常州高浜神宮寺賢栄と寺過去帳及住職命日記にあり。)

(逗子町誌は慶伝としている。)

第五十八世 亭 尊 慶長八年(1603)四月五日示寂

近世の神武寺

寺に「神武寺住持世代」という慶長十三年(1608)九月吉日年紀の古文書がある。これは第五十九世の尊祐が記したいと思われる。また「畧年代記」という第六十四世の體安の手になるものらしい文書もある。六十世尊雄から六十九世実順までの略歴と命日を記した断簡文書等もあるので、これらを参考にして近世神武寺の寺史をたどってみよう。

五十八世亭尊は神武寺縁起の筆者として知られている。文禄三年(1594)の頃というと今迄寺の有力なパトロンであった小田原北条の滅亡(天正十八年・1590)によって寺が大きな衝撃を受け、寺勢衰微の方向を辿っていた時期である。この頃住職に就任した亭尊は一意専心寺勢の挽回に努めた。その手段の一つとして縁起執筆を思い立ったのにちがいない。慶長八年(1603)示寂の時まで寺復興めざしての彼の努力は続けられた。現在の薬師堂の建て物が造立されたのも、亭尊の時代ではなかったかと推測されている。

五十九世尊祐は慶長八年から元和九年(1623)に隠居するまで、二十年間住職を勤めた。慶長九年



図21 略年代記 (部分)

六年(1629)隠居、同時に世を去っている。

六十一世尊栄は常陸高浜の人で、五十七世賢栄の弟子にあたる。神奈川県重要文化財に指定されている「大威徳明王画像」の表装を代官長谷川三郎左衛門の寄進で行なっている。別当をつとめていた桜山大神宮の社殿修理を、正保四年(1647)に行なうなどして、三十三年間住職を勤めて寛文元年(1661)十一月十八日当寺でなくなった。六十二世賢誉は寛文二年(1662)十一月から住職となり、薬師三尊の修理を行ない、寛文六年(1666)には十二神将像を新しく造立した。堂の造作も行なって、これらの費用調達のために三浦郡の中を勧進してあるいている。寛文七年(1667)池子村に仏光庵を建立し、寛文十一年(1671)桜山の大神宮社殿を再建、貞享二年(1685)薬師堂の前に五十七世賢栄追福のため千部法華塔を建立、元禄十年(1697)には堂前に石造観音像を建てた。残念ながら現在これらの石造物は見あたらない。六十三世賢秀は三浦郡の人で、元禄二年(1689)に入山して賢誉の弟子となった。住職になったのは元禄十三年(1700)で、法華行者となり生涯行者としてのいとなみを絶やさなかった。親王やぐらにある久明親王の墓に法華経を墨書した写経石を詰め続けたという。また先師賢誉のために千部供養塔を薬師堂前に建立した。正徳三年(1713)五十八歳で世を去ったが、在職の間、堂宇の修復など放置していたためか寺がすっかり荒廃してしまった。

六十四世體安はこの荒廃の中に住職となった。彼は在職中寺内堂宇の復興のために心血を注いだ。享保元年(1716)まず手初めに庫裏の台所を建てなおした。続いて寺入り口の通路として岩山を削って現在ある切り通しを開いた。山麓の惣門の建て替えをし、薬師堂の十二神将を新たに造りなおし、古い像は浦郷の正観寺薬一王神へ譲った。このほか佛具や家具類の調達、先住の残した借金の返済、質地の取り戻し、薬師堂の石段修理、薬師堂や山王社の造作、鐘楼屋根の葺き替え、境内地への植林等を行なった。享保十九年(1734)の四月隠居して、鎌倉の杉本寺へ移る時まで寺勢挽回へのひたむきな努力が続けられた。表参道の途中に車地藏が祀られているが「享保十乙巳年(1725)十二月十二日、願主體安」の刻名がみられる。杉本寺へ去ってからなくなるまでの二十年間、體安はふたたび神武寺を訪れることはなかったという。墓は風化がいちじるしく進んだ状態で、みろくやぐらの一

(1604)三月三日、火災のため客殿を焼失、住僧達はやむをえず「みろくやぐら」の中に仮り住まいをした旨が畧年代記に記されている。中尊阿弥陀如来だけは助けだすことができたが、台座後光両脇侍は焼失したという。慶長十三年(1608)に三尊の像がようやく再興された。尊祐は隠居後二十六年間も在世して、慶安二年(1649)八十一歳の長寿を保ち世を去っている。次の六十世尊雄について特記することは、元和の古鐘鑄造であって、時の代官長谷川長重と協力、鐘の願主となっている。寛永

隅に祀られている。「畧年代記」は體安の手で記録が始められたようである。没年は寛延四年(1751)六月十五日である。

六十五世栄山が入山したのは享保十九年(1734)で、福島^{ふくしま}の観音寺から移られた旨の記録がある。在職は八年間程で、その間に紀州雲蓋院の堯鎮僧都など優れた人材を育てている。六十六世円道は生れは下野国、鎌倉宝戒寺の観国僧都の弟子である。寛保元年(1741)十二月神武寺住職となった。在職中に山麓の惣門や鐘樓の再建をした。延享四年(1747)には海宝院との寺境いの争いで訴えられ、苦境に立たされたこともあった。この時の訴訟文書が残っている。宝暦四年(1754)逆境の中に世を去った。六十七世の玄道は下総の国の生れで、六十五世栄山の法類である。宝暦四年の五月に神武寺の住職となった。宝暦十一年(1761)薬師堂前に新しく楼門を建立し、同十三年(1763)には三十三年毎に行なわれる薬師堂の開帳をしている。明和六年(1769)正月二日火災で客殿と鐘樓を焼失した。このあと明和八年(1771)八月に鐘を再鑄したが、これが太平洋戦争の時供出した鐘である。安永四年(1775)客殿の再建がなり、この年の五月に住職を隠居、安永八年(1779)六月七日寺内でなくなっている。行年六十七歳であった。

六十八世実深は安永四年五月の入院^{しゅういん}で、以後三十九年間住職を勤めた。この間庫裡、板倉、物置、台所などを再建した。勝手道具の新調なども行なっている。寛政二年(1790)四月には海宝院との境界争いが再燃したが、享保十年(1725)に六十四世體安が建立した車地藏のある場所も返還するようにとの海宝院側からの申し入れがあった。実深は延享四年(1747)の地境争いの古記録を証拠にして、寺領を守り通すことができた。文化十一年(1814)に隠居したが、その後は桜山の法龍院で晩年の十三ヶ年程を過ごしている。文政十年(1827)三月十四日、八十四歳の高齢で天寿を全うした。法龍院跡の近くにある一柳家は実深の出た家で、今も実深の位牌を祀っておられる。

六十九世実順は文化十年(1813)十二月十三日に神武寺に入院した。生地は越後の新津である。その業績でわかっていることは、境内の造林に勵んだことである。天保八年(1837)三月十一日金沢の円通寺でなくなったが、ちょうどこの頃は、全国的な飢饉のため檀方が困窮していたので、葬式を延期し、取り敢えず仮埋葬のみを三月十二日に行なっている。そして貧しい家百十四軒へ救い米を配った。僧侶らしい心暖まる計らいである。天保八年頃は飢饉のため桜山・沼間あたりでも百人にあまる農民が、毎日のように二子山へ「葛の根」や「蕨の根」を掘りに行ったという伝えが残っている。

七十世貫順は天保三年(1832)に神武寺住職として入院、二年後の天保五年(1834)三月二十五日、寺男の不注意から出火して、薬師堂・鐘樓を除く客殿庫裡の全部を焼いてしまった。焼けた堂宇庫裡を再建するため、この後住職や檀家の苦しい努力が約八年間続き、天保十三年(1843)三月ようやく、今日私どもが見ている建て物が完成した。客殿の瓦葺きの屋根は、先き頃現住土屋慈順師によって葺き替えがなされたが、建て物のあらましは、天保期に貫順が建てたままである。嘉永六年(1853)二月二十八日貫順は示寂、この年の六月にはペリーが浦賀に来航、十二月にはブーチャチンが長崎に来航している。いよいよ日本の黎明の訪れである。

近 世 神 武 寺 の 住 職

重複する点もあるが、古代・中世の住職との関連もあるので、次に記しておく。

第五十九世 尊 祐 慶安二年(1649)二月二十一日示寂、八十一歳

第六十 世 尊 雄 寛永六年(1629)一月十八日示寂

第六十一世 賢祐(改め尊栄) 寛文元年(1661)十一月十八日示寂

第六十二世 賢 誉 元禄十三年(1700)十二月十三日示寂

第六十三世 賢 秀 正徳三年(1713)十二月十八日示寂、五十八歳

第六十四世 體 安 寛延四年(1751)六月十五日示寂

第六十五世 栄 山 寛保三年(1743)六月十一日示寂、桜山・相沢家(川端)に位牌あり。

第六十六世 円 道 宝暦四年(1754)五月三日示寂

第六十七世 玄 道 安永八年(1779)六月七日示寂、六十七歳

第六十八世 実 深 文政十年(1827)三月十四日示寂、八十四歳 桜山、一柳久雄家に位牌あり。

第六十九世 実 順 天保八年(1837)三月十一日示寂

第七十 世 貫 順 嘉永六年(1853)二月二十八日示寂

近 現 代 の 神 武 寺

語るべき史料は意外に乏しい。今後の調査と研究に期待して先をいそごう。

七十一世韶願は田浦の石渡家から出た方である。入山の時期は安政初年の頃と推測されている。在職四十五年間、在職中千日祈願をして、井戸の水を得たという。明治三十二年(1899)八月四日になくなった。七十二世佐久間暢海師は、昭和二十年十月二十三日示寂、行年七十九歳であった。

七十三世は尾崎暢光師で、昭和十七年(1942)から住職、昭和二十一年(1946)に大磯の寺に移った。昭和四十五年(1970)三月十三日大磯でなくなられた。

七十四世は現住の土屋慈順師で、昭和二十一年(1946)十二月より住職となられ今にいたる。

(付2) 神武寺寺域内採集の遺物

軽 部 一 一

測量調査に併せて多くの遺物が表採された。主な出土地点は表のごとくである。最も多くの遺物が表採されたのは、池子参道(別名裏参道)客殿北谷の井戸附近である。そのほとんどが陶磁器片で、これは生活に密着する“井戸”が舞台になるからであろう。(各遺物は別表参照) 2は客殿北谷である。これも生活用品が多い。 3. 客殿平場 4. 薬師堂平場 5. 南正面平場 6. みろくやぐら平場 7. こんぴらやぐら平場である。

「やぐら」の中には床や側壁に穴を掘り、そこに火葬骨を入れた壺や甕を納めた例がよくみられる。(註1)これらが、再葬や、後世、なんらかの際に開口され、とり出されたものであろう。(註2)時

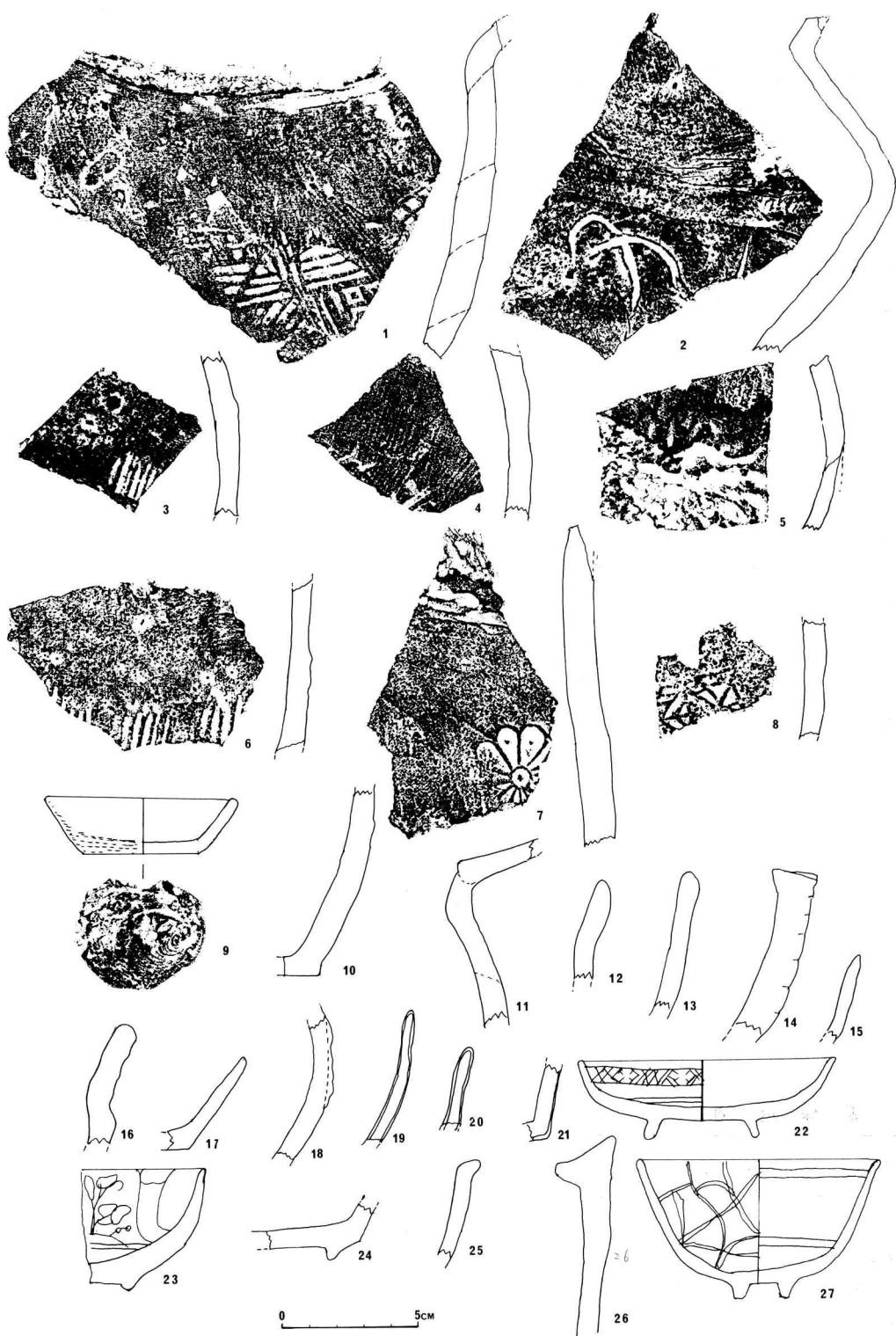


図22 神武寺寺域採集の遺物

代を反映し、又、用途を求めた為か常滑、瀬戸が多い。近年、産地が問題になる須恵質無釉のものが混るが、少し古い平安末～鎌倉初に該当すると思われる。この両地点に出土する土師質（素焼土器）のもの、（かわらけ、甕片）いづれも細片で時代判定に問題があるが、鎌倉市内の発掘所見からみて、広義の中世のものであろう（図17-9）。特殊なものとして舶来陶磁器片がある。主に青磁茶碗である。一般的でないものだけに、“神武寺”の時代的、社会的背景を考える上で重要な遺物である。その中でも、よく話題になる寺院保管の、「緑釉黒絵双獣耳瓶」など、類例が少ないものだけに、今後、生産地、時代、出土地点に研究の進展が期待される。

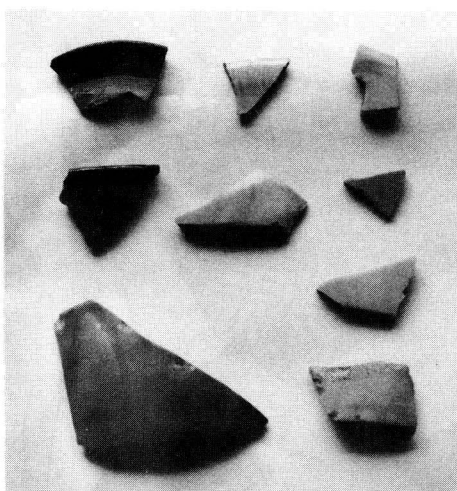


図23 寺域採集の陶磁器片

表 採 遺 物

出土地点	No.	種類	産地	時期	所 見	註
1. 裏参道 井戸附 近	1	大 甕	常 滑	鎌倉初	焼成やや甘く、灰黒色、口～頸部破片である。器表面に格子状押文あり、2 cm幅ぐらいのひも上げ作り残る。	図17-1 図18
	2	壺	"	"	胴下部より底に移る部分、土灰色で石英粒多く含む。無釉だがよく焼きしまり、胎土の石英が溶けている。	図2-10

3	広口壺	常滑	鎌倉初	焼成硬調、内外面共黒斑状釉点が目立つ。胴部上にへう書き文様あり、完型品の類似品が同寺院にある。	図17-2 図18 註-2
4	大2 甕片	"	"	石英粒子多く含む、焼成硬調、器内面指あと多く残る。	
5	甕	"	鎌倉	表釉良く焼け、光りかがやく、押文あり、肩の部分か？	図17-3
6 c	壺	"	"	灰色表面釉よく溶ける。硬調でハゼている。押文あり胎土細密 フレ部分はつなぎ目であることが良くみえる。	図17-5 図18
7	壺	"	鎌倉	硬調である。無釉だがよく焼しまり、赤色化している。押文は四菱状で“田”の字を斜目に押す。器壁薄い。	図17-8 図18
8 a	大甕	"	鎌倉末 ～室町	内外面と良く焼きしまる。色調暗赤色、胎土精製されるが微石英粒多く含む。	図17-6
9	大甕	"	室町	外面灰釉白くとんでいる硬調な焼成、作製技術からみると内外3分1良くやけ、芯焼残る急激な火度を示す。菊花押文あり、瀬戸瓶子に多くみられる文様である。	図17-7 図18
10	大4 甕片	"	"	色調 灰黒、灰釉がとんでかかる。無文様	
11	大甕	"	"	内面 黒灰色、外面～芯まで明るい赤銅色、胎土よく精製され石英粒子少なし。	
12	壺	行基焼	鎌倉	須恵質無釉胎土 青味灰色、刷毛目内外面にあり	
13	壺	"	鎌倉初	頸部破片 須恵質で硬く焼しまる。完型類似品寺院にあり。長頸瓶で11C（黒笹90号室）頃か？	図17-11 註2参照
14	壺 3片	"	"	広口壺口縁、焼き上り軟調、生やけにススがついている。ロクロ引き上げ口づくりで上手である。	図17-12
15	鉢	"	"	暗黒色硬調、灰釉よくのり、黒色に近い。胎土もよく精製されている。	図17-13
16	壺	瀬戸	鎌倉	灰釉 胎土 黄味灰色石英粒まじる。肩から下、無釉	
17	壺	"	室町	鉄黒釉うすくかかる 胎土精製	
18	すり鉢	"	"	鉄釉が口縁～外面にかかり、内に粗雑な櫛目あり、小形であり、薄い器厚	

19	瓶子	瀬戸	鎌倉～ 室町	内外面よく溶けたくち葉の釉かかる。胎土きわめて良、後世油を入れたものか、貫入を通して黒くシミ残る。	
20	大形鉢 4片	"	室町末 ～桃山	内外共良く釉かかる。色調黄色灰釉でこまかい貫入多く入る。胎土灰白色で良、厚手ロクロ痕よく残る。外面竹管刺突文あり、又へら片刃状で葉状浮文つくる。	図17-14
21	山茶碗	"	"	胎土精製、内外共良く貫入の入った釉かかる。色調朽葉色	図17-15
22	小 壺	"	"	内外面、鉄釉（黒色）よくかかる、ごく薄手で、首部に一条の白線が入る。	
23	片 口	不 明	不 明	ごく薄手の片口破片、口部貼り付状態が良くわかる。釉は失透性の灰色で近世萩焼によくみられる。	
24	花 瓶	瀬戸 3片	桃 山	口縁と高台部分、いづれも青味の貫入の入った光沢釉がよくのっている。器厚薄く胎土精製。	
25	鉢	益 子	江 戸	やわらかい明るい膚色の胎土に内外面共鉄釉かかる。	図17-16
26	皿	瀬戸	江 戸	外面無釉、内面硬い鉄釉かかる。胎土ごく精製、釉色濃錆色	図17-17
27	酒会壺 ?	"	江戸初	胎土やわらかい精製粘土、内面鉄釉、外部織部釉（銅を還元させ、濃い緑色発色）龍状の貼付文がある。元代の青磁によくみられる様式である。	図17-18
28	小 鉢	"	"	外面無釉、胎土悪く雑、内面織部釉、発色良	
29	不 明	"	"	内面無釉、ロクロ痕よく残る。外面鉄黒錆色よくのる。光沢よく、焼成硬調	
30	茶 碗	青 磁	北 宋	口縁 胎土精製、白色、ゴマ少々入る釉色、黄味緑色釉厚い 外面 刻文(剣頭文)あり。竜泉窯(浙江省)でも早い頃か？	図17-19 図18
31	茶 碗 2片	"	南 宋	胎土白色、口縁はやや丸く外反し色調は明青色で南宋のものと思われる。共に釉厚い。内面に少し貫入がみられる。	図17-20 図18
32	香 炉	"	"	直立半筒型香炉片、内面無釉ロクロ痕残る。外面青灰色の釉良くのる。多少貫入あり。	図17-21 図18
33	高台付 小 皿	有 田	江戸初	染付、内面見込み菱文、底二重線、口縁二重線内に格子文、四菱くずし文、外無文様 細い高台外反、胎土、釉色やや暗	図17-22

	34	高台付 中皿	有田	江戸初	染付 器厚く作り、おおらか。胎土は精製されるがややゴマが入る。筆運びは達筆である。	図17-23
	35	高台付 瓶	"	"	釉色良く、高台に2本線あり、見込みに"の"複重文様あり	図17-24
	36	茶碗他 26片	"	江戸中	網目文、菊草文その他種々の染付あり、一括して江戸中期とする。一片のみ、外青磁釉、内染付のある茶碗口縁あり。	
	37	無釉 陶器 A一括	不明	中世	"かわらけ"とよばれるものを一括する。ほとんど細片で、完型品は少ない、図に示すのはその一例であり、ロクロひき、糸切底である。小型の部類に入る。所々の発掘例からみて鎌倉期である。	図17-9
	38	無釉 陶器 B一括	"	"	"かわらけ"大と土師質埴の破片である。蔵骨容器として土師質埴が良く使用される。別名行基焼といわれるが室町期?	
2. 客殿 北谷	39	天目釉 茶碗	瀬戸	室町	瀬戸天目茶碗口縁である。口縁部黒色光沢釉かかり中段よりアメ釉に移っていく。胎土にスが入る。	図17-25
		不明	"	江戸	内側にフタ付のアゴがある大形の甕片?である。内外面よく朽葉色の釉かかり、強いへら刻文(竜文?)の上に鉄釉をのせている。	図17-26
	40	茶碗	青磁	元	胎土灰色口縁外反、外面蓮弁浮文、釉黄味暗緑、器厚く下手ものと思われる。	図18
	41	茶碗他 4片	有田	江戸中	1. 図17-22と類似する。こちらの方が内面に灰がとんで釉と混る。 2. 外反する小茶碗、時代は江戸中期か、網目文がつたない	図17-27
	42	無釉 陶器 A一括	不明	中世	ほとんど"かわらけ"細片だが底部からみて20個体分ぐらいか いづれも胎土精製され明るい膚色、大形のものが多い。	
	43	無釉 陶器 B一括	"	"	厚手の素焼土器、胎土、器型からみて"手焙り"と思われる。 鎌倉市内の発掘で処々見られる。	
	44	紡錘車 2点	"	不明	(大)径9cm、瓦質状の黒色素焼、芯に径8mmぐらいの心棒穴あり。二次焼成をうけている。 (小)径5.5cm素焼状 炉器化している。胎土良質、芯10mmぐらいの穴、使用されていたらしく断面が錘状に摩耗している。	
	45	石鍋	"	中世	滑石製の石鍋が一片出土している。中世の一遺物なので小片だが類型として記す。	

3.客殿 平場	46	油德利	備 前	江 戸	胎土硬質で完全に炉器化している。底部残欠で内面ロクロ痕残る。裏底に花押と思われる文様あり。	
	47	鉢 2片	青 磁	南宋 ～元	胎土灰色ゴマ多く入る。口縁部破片で花卉状にロクロひき上げる(〇状)、器型は鉢に属する。釉はやや黒味がかかった青灰。外面、菊花文の太い刻文がある。(幅2cm)、時代龍泉窯元代のものであろう。	図18
	48	茶 碗 2片	青 磁	江 戸	胎土、白色、よく精製されている。小型の茶碗で内面、口縁部に連続渦卷文(雷文)が陰刻されている。釉色、明るい青灰色で釉は薄い。	図18
	49	灰 釉 陶 器 2片	美 濃	中 世	器形不明、高火度で焼いた為、灰釉がかせて斑状にとんでいる。胎土からみて美濃系のものと思われる。	
4.薬師 堂 平場	50	素 焼 土 器 一 括	不 明	中 世	いわゆる“かわらけ”類である。小型のものと大型のものに二分できる。いづれも細片だが量的には多い。細かく見れば、小型のものは手作りの厚手のものが多く、大型のものはロクロ引き上げて薄手のものが多い。時代の差か、用途別(灯明皿と祝事に使う祝杯の別か)、スス痕もあり、この二面性が考えられる。出土位置から考えて興味深い。	
5.南正 面 平場	51	壺	常 滑	室 町	無釉厚手	
	52	山茶碗	美 濃	鎌 倉		
	53	壺	瀬 戸	室 町	いわゆる“古瀬戸”で黄褐釉かかる。	
4. みろく やぐら	54	瓦 (大陸 風)	不 明	江 戸	軒平瓦、忍冬唐草文、外郭つき、径28cmぐらいの右半欠、黒灰色のイブシ焼で江戸再興のものか、寺院の歴史を知る上で貴重な資料である。	
	55	素 焼 土 器 2片	不 明	中 世	いわゆる大形の“かわらけ”、土師器の終末からつながる。素焼系の環型土器、胎土明るい良質粘土	
5. こんぴら やぐら	56	素 焼 土 器	不 明	中 世	素焼壺底片、胎土砂を含み“ス”が入るロクロ、糸切底である。切り放し後、乾燥時に置いた板痕残る。	

小 考

近年、中世関係の生活遺跡(館、城址類)や、寺院が多く発掘されている。そこに伴う陶磁器類は、その遺跡の年代考証に欠くことのできないものとなっている。一方、その判断基準は今までガラスケースの中の完形美術品的なものが重視されたが、最近では窯址出土の細片が中心になっている。特に胎土や釉薬の断面が直接実見できるのが強味である。よって産地固定の追求は日進月歩の進展

がある今日である。さらに遠く内外のものが、展覧会によって直接手身近に実現できる。神武寺の遺物鑑定には赤星直忠氏が、日本工芸館の長谷部満彦氏と合議したものを筆者が追補したものである。遺物からみて寺歴にある古代（奈良）創建を裏づける資料は全くないが、中世の再興を思わせるには十分な資料である。それも鎌倉幕府の近郊という地理的条件を裏づける青磁片などその資料的価値は高いものといえる。

註1．赤星直忠他『横須賀市長坂やぐら群の調査』長坂やぐら群発掘調査団1982

註2．赤星直忠他『神武寺』逗子市文化財調査報告書1．逗子市教育委員会1970

○参考文献

- 『関東の中国陶磁』群馬県立歴史博物館 1982
- 『日本出土の中国陶磁』東京国立博物館 1978
- 『近年発見の窯址出土中国陶磁展』出光美術館 1982
- 『中世の陶器』神奈川県立博物館 1972

あ　　と　　が　　き

この調査報告書は昭和57年と58年の2年間にわたり実施されました。この調査にあたり大変苦勞されました赤星直忠先生(団長)、他関係者に心から御礼申し上げます。

神武寺は関東でも比較的由緒の古い名刹であり、自然環境もよく保たれ、山岳寺院の面影を十分とどめております。しかし、火災で文書、什宝などの多くが消え、明確に寺史をたどることはむずかしく、とくに中世以前については資料がきわめてとばしいと聞いております。この度の調査は遺構そのものが、名越・住吉城跡に見られるものと同一的性格のため地形測量を中心に行い、並行して神武寺関係の歴史的資料の見直し、遺物の収集を行い、歴史的考察を行ったものであります。これらの調査に加え、今後発掘調査を実施し、神武寺創建当時の全体像を明らかにする必要もあります。発掘調査は次の機会を待つことにして、この報告書が逗子市の歴史上よき伴侶となれば幸いです。また刊行にあたりましてご援助、ご協力下さいました方々にも厚く御礼申し上げます。

逗子市教育委員会社会教育課長

堀　　内　　智　　也

昭和59年 3 月25日 印刷

昭和59年 3 月31日 発行

逗子市文化財調査報告書第十二集

神武寺の城郭遺構

編 集 逗子市教育委員会
発行者 逗子市逗子 4 - 2 - 10

印刷所 有限会社 モ リ ヤ
逗子市久木 3 - 4 - 11